

school live! ～ようせい～

どっかのだれか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

並大抵のご都合主義ではどうにもならない状況なので、とんでもないご都合主義を入れて希望を見出してみましたとき。

# 目次

「妖精さんと、ぞんび……?」	1
「妖精さんと、がくえんせいかつぶ」	15
「妖精さんと、いちにちのおわり」	37
「妖精さんの、いつもどおり」	53

「妖精さんと、ぞんび……?」

人類が衰退してはや数世紀。

かつて栄華を誇った文明は今や見る影もなく、旧人類は地上の支配者を引退して、ゆつくりと絶滅の一途を辿っています。

と言いますか、もう残り一人だけなんですがね。わたしではありませんよ? でもあと一人だけです。その辺りの詳しい説明は前にした気がします(だいたい小説で言う9巻)ので、ここでは説明を省略しますが。

ともかくにもそんな絶滅寸前の人類は、「まあ仕方ないか」と軽い感じで日々を暮らしています。人間、絶滅し掛けている程度では日常を崩すことはありません。ちゃんとご飯を食べて、寝て、働かなくてはなりません。絶滅よりもリストラの方が怖いのです。

そんな時代の中で、わたしはそこそ偉い地位を面倒事と一緒に押し付けられて、その面倒事を回避するために一生懸命仕事していたはずなのですよ。

確かに時々洒落にならない事象(事件と言うと責任問題が発生します)が起こったり、わたしが天涯孤独になるくらいにはダークでシリアスな事もありましたが、それは昔の話。基本的には牧歌的な風景の中で、ほのぼのした暮らしを送っていたはずでした。

「ほうら、あそこには人影が腰を低くしてあちこち歩いていますよ。一体どこへ行くんでしょうね。あら、集って道端で何かを食べてます。おいしいものが一杯溢れてるんでしょうねえ。何故か体の一部が崩れてますけど、きつと体が崩れるくらい怠けてても問題ないくらい平和で牧歌的なんですよあははは」

……そんなわきやねーです。

腰が低いのは体がまともに動かないから。道端で食べてるのは人肉。身体の崩落はぼろぼろに腐ってるからでしょう。こんなのどこらへんが平和で牧歌的なんですかねあはは。

「……………」

(・ワ・)

状況を整理しましょう。なぜこんな現状になってるのか。

いつもの如く仕事をして、いつもの如く妖精さんと出会い、いつもの如く童話災害に遭って、いつもの如く大ピンチ。そして今に至る。「ええそりゃ知ってましたよ毎度毎度のトラブルがだいたい妖精さんの仕業だってことは」

「てれますか?」「ほめられました?」「ほめたのでは?」

「褒めてません」

「だってよ」「つまりじゅんすいなひょうかでは?」「けっこういいてんすう」「てれますな」

「褒めてませんってば」

妖精さん。わたしが居た世界における新人類であり、わたしの足元に転がっている小人のような体躯の存在です。

三頭身、身長約10cm、そして大のお菓子好き。でもお菓子を作ることは出来ません。電磁波が嫌いで、驚くとボール状に丸まり、脅すとほぼ真水を失禁します。楽しそうなことがあると簡単に増殖し、一通り騒ぐと散っていく集合離散の性質を持ち、放っておくと一夜で町やら国やらオーバーテクノロジーやらを築いてしまうトンデモ生物です。

「ここはやつがいけませんな」「おやすみ?」「いつかおやすみ」「いっばいやすんでもいいのよ?」「でもなにかあぶないかんじ」「これは?」「ペロ」「これは!」「せいさんかりだ!」「じゃあしにます?」「なむあみ」「くさつてもぼさつ?」「そくしんぶつでは?」「みーらですか」「ほーたいほーたい!」「たいーほたいーほ」

まあ一見するとそうは見えませんがね。

さて、そんな彼らに付き纏われて、いつものように適当に遊んでいたんです。そしたらパッと光に包まれて、気がついたら腐った方々(物理的)の沢山いる所に飛ばされたわけです。

「妖精さんや。ここが何処だか分かりますか?」

「ここ?」「ここはどこ?」「ここはそこ」「そこはつまり?」「さあ?」

「ちずにはのってないなあ」「まだみぬばしよですが?」

「まだ見ぬ場所……じゃあ、異世界?」

「そうかも?」「ちがうかも?」「ちがうけど」「にてる」「もともとおなじ」「にわとりとひよことか」「あっちがにわとり」「こっちはひよこ」  
鶏とひよこの違いは状態。わたし達の世界が鶏で、この世界がひよこ。もちろんひよこが鶏になるわけで、それを当てはめると。

「ここって過去なんですか?」

「そうだ」「かこだった」「かこって?」「むかしのことです」「あおかつたじぶんのであい?」「あるときへもどれたらー」「こうかいさきだたず」「しななきややすい」

「あなた達が過去へ送ったんですよね?」

「そうだっけ?」「そうだった」「なんとなく」「こうかいはしてない」「あるときへもどらなくてもいいです?」「かこにとらわれないので」「なんか、でじゃびゅ」

そりゃあデジャヴも感じるでしょうね。なんせ何回も過去へ戻って繰り返し返した経験がありますから。でも今回は逆行ってレベルじゃ済まない気がする。

「ここは一体何年前なんでしょう?」

「にんげんさんじゃないにんげんさんがいたころー」

「人間さんじゃない人間さん? ……あれ?」

ふと見ると、最初はもの珍しさからか10人以上に増えていた妖精さんですが、今ではたった3人になってます。妖精さんはいつの間にか増えることはあっても、いつの間にか減ることはそうそう無いのですが。

「あなたたち、なんか人数減ってますん?」

「あれなら」「どっかにいって」「たべられた」

「食べられた……?」

はて、そう言えば何かとんでもないことを忘れていた気がします。それはわたしの生死に関わるやも知れない重要なことだった気が。悪寒を感じて何気なく背後を振り返ってみました。

……ええ。忘れていたのは一種の現実逃避だったのかもしれない

ん。でも仕方ないじゃないですか。人間は自己を守るためにいろいろな記憶を削除するのです。現実逃避によってわたしは冷静に現状把握が出来たのですから、忘却法も捨てたものではありません。忘れてたっていいじゃない。人間だもの。

しかし、それは迂闊にも背後を振り返ってしまったせいで、圧倒的現実となってわたしたちに押し寄せてくるのでした。

「うわあああああー！」

「きやー」

「わー」

「ひー」

妖精さん三匹をお供に、わたしは一目散で逃げます。その背後から迫るのは、人型の原型を留めていながらも、腐ってしまったている方々。まだわたしの悪友の方がましです。あれは害を撒いてはいませんでしたから。

まあつまり、ゾンビですよ。ゾンビ。

(・ワ・)

インドアだったはずのわたしは何時からこんなに走れるようになったのか。まず間違いなく数々のトラブルのせい。でも今はありがたい事です。こうやって逃げてるだけの体力があるのですから。

「とは言え、いずれ限界が来るのも事実……」

そこかしこにはわたしたちでは再現できないほど高度な文明による建造物が立ち並んでいます。あれがコンクリートと言うやつでしょう。中に立て籠もればしばらくは安心でしょうが、その中にもゾンビが居た場合は袋の鼠です。美味しくいただけかれちやいます。

「ねずみっておいしいの?」「さあ?」「たべたことないからのー」

肩やら髪やらに引っ付いて、先ほどの悲鳴はどこへやらの妖精さん。どうやら楽観視しているようですが、わたしが捕まったらあなたたちも道連れですからね?。

しかし、分かってはいるのです。この非常識の塊に頼み込めば、今

の状況を脱することが出来ると言うことは。でも相手だって非常識です。ゾンビです。妖精さんがゾンビとぶつかった場合何が起るのか。考えるだけで面倒事の予感……

なのでわたしはぎりぎりまで逃げることにしました。妖精さんが一人でもいれば死ぬことはないですし。

「しかし、此処にはもう生存者はいないのでしょいか？」

周囲の建物は窓が壊れたり壁が崩れたり、広範囲で争った形跡が見受けられます。きつと元々は真つ当な人間が住んでいた、と、思いたい。切実に。まさかゾンビさんが住人なんてことはないですよね？

などと推測を重ねている内に、何だか無駄に広い広間へ出ちやいました。周囲のゾンビさんには目を瞑るとして、地面は先ほどとは違う土。近辺には球技に使うものであろうネットやボール。そして目の前にある、これまでとは比べ物にならないほど大きな建物。

この形は、もしや。

「学舎ですか？」

「がくしゃー」「でもこのじだいでは」「がっこー」

「ああ、学校と言うのでしたっけ」

学校、学校ですか。学舎だったりABCの3人だったり、旅先を除いてあまり良い思い出はありませんね。あつたのは面倒と厄介と疲労と腐れ縁でした。ああ！ やっぱりの女は腐ってる！

「こっちも腐った人ばかり……」

『その人！ 校舎まで走れ！』

周囲をゾンビさんに囲まれた中で、建物に入るべきか外へ出るべきか悩んでいると、建物の側から声が聞こえてきました。どでかい音量です。おじいさんの持ってた大砲の音のようです。これはもしや拡声器？

とりあえず、道を示してくれたことには感謝しましょう。

「ぎゃー！！」

「ぴゃー！！」

「ひゃー！！」



おかげで妖精さんは丸まってしまいました。

咄嗟に一つを掴んで確保。ほかの二つはころころ転がって、ゾンビさんたちの目を引いてくれます。彼らの犠牲を無駄にはしません。

「逃げます」

人間ってというのは現金なもので、妖精さんが働かなくなると命の危険が迫った途端、わたしの体はフルパワーでひた走ります。しかも今回はゴールが定まっているので全力です。そこらのゾンビさんじゃ相手にもなりません。

息せき切って校舎の中へ。二階への階段には机のバリケード。

「入れないじゃないですか!」

これは行き止まりに誘ってゾンビに襲わせる罠だったのか……

と思つたら、階段の奥から二人の女の子がやってきました。一人はシャベルを持っています。何故にシャベル?

「待ってる! 今どかさから!」

そう言つて二人はバリケードの上段部分を取り外しています。元々上の方は緩かったのか、すぐに撤去されました。

「掴まって!」

シャベルを持った女の子がバリケードの上から手を差し伸べてくれます。なんてありがたいんでしょう。学舎の生徒やクソガキ様……もとい、ABCの三人とは大違いです。もちろんありがたく手を取らせてもらいました。

「よいしょおー!」

「うわあ!」

バリケードの向こうへぶん投げられました。前言撤回。結構酷い。

しかし女の子二人は大慌てでバリケードを直しています。その向こうからはゾンビさんの群れがぞろぞろとやってきます。どうやら切羽詰っていた状況みたいなので、許すとしましよう。

女の子二人はバリケードがちゃんと機能していることを確認すると、ほっと胸を撫で下ろしてわたしに声をかけてきました。

「あの、大丈夫ですか? 噛まれたり、負傷したりとかは……」

「あ、はい。大丈夫です」

「この子はシャベルを持ってない方の子です。礼儀を持って接する子は好きですよ。」

「本当に大丈夫か？ 噛まれてるんなら本当のこと言えよ？」

「大丈夫ですつてば」

こっちはシャベル持つてる方。結構がさつで腕白そうです。

それにしても、ゾンビに噛まれてるかどうかをやたらと心配してくる辺り、噛まれるとゾンビさんになっちゃったりするんでしよるか。それならあれだけゾンビさんが居た理由も説明出来ますし。だとしたら本当にまずい状況だったのかも。

「取り合えず、助けていただきありがとうございます」

「いえ。こちらとしても、外の状況を知ることが出来るのはありがたいですから」

「生存者が他にいるってのは安心できることだからな」

一先ずお礼を言うと、気にすることはないと笑う二人。この様子を見るに、生存者はほとんどいないようですね。

その後は流れで自己紹介。しかしプライバシーの観点から今回も名前を伏せさせて頂きます。

「わたしは……まあ、好きなように呼んで下さいな」

「好きなようにつて、どう言う事？」

「訳あって本名を名乗れないのです。そちらも偽ってもらって結構ですよ」

「はあ……なら先生と呼ばせて頂きます。そちらの方が都合が良いですし」

と言う訳で、とりあえずは先生と呼んでもらうことになりました。簡単に受け入れて貰えたのはありがたいですが、都合が良いとはどう言うことでしょうかね？

「じゃああたしは、シャベルちゃんとも呼んでくれたまえ！」

「じゃあシャベルで」

「えー、そこはちゃんまで言うべきだろー？」

「良くてもさんまでです」

「ちえー」

頬を膨らませる女の子、もといシャベルを窺ってから、今度はシャベルじゃない方が子が挨拶。

「じゃあ、そうですね。私は部長さんでお願いします」

「部長さん？」

「ええ。こんな時でも、いや、だからこそ活動している部があるんです」

部活動と言えば確か、昔の学校生活にあった生徒活動だった筈。話には聞いたことはありますが、一体何の部活をしているのでしょうか？　こんな状況でも活動できる部……生物部とか、生活部？　もしくはシャベル部？　お喋りをする部なら、のばら会がそんなだった気がしますが。

と考えていると、階段の上の方から足音がします。そして間もなく、また女の子二人が下りてきました。

「先輩！　一体何が……え？」

「くるみちゃん。リーさん。校内放送なんかしてどうしたの？」

きやープライバシーがー！

「……………」

「……………」

「……………」

本名を交換することになりました。シャベルと名乗った少女はくるみさん。部長と名乗った方はゆうりさんと言うそうです。こうなつては隠すのも憚られるので、わたしも本名をぶっちゃけておきました。ただ、一応これからは先生と呼んでくれるみたいです。ありがたい。

「あれー？　どうしたの？」

「なんと言うか、ゆき。お前は本当に……まあいいか」

「くるみ先輩。その人は？」

「ああ、この人は今日来た新任の先生だ」

「えっ」

物申す前にゆうりさんに引つ張られてしまいました。その間にも

くるみ（この子は呼び捨てで丁度良い）による盛大な誤解ががが。

「何するんですか。早く誤解を解かなければまた面倒事です」

「……先生。お願いがあるんです。どうか話を合わせて下さいませんか？」

「……と言いますと？」

どうにも真剣に話すものですから、わたしまで真剣に聞いてしまいました。

「ゆきちゃんは——あの黒い帽子を被ってる子ですが——あの子は、この災害が起きてしまつて、親しい人を失つてしまつたんです。それで、その、何と言うか……現実を認識できなくなつてしまつて……」

「……なるほど」

身も蓋もなく言えば、精神を病んでしまつたと言うわけですか。確かに、こんな地獄絵図を見続けた挙句に親しい者までなくしたら、そりゃあ心だつて壊れる人は壊れるかもしれせん。わたしは、まあ、非常識なんてものはもはや日常の域まで達し始めてますからね。決してわたしが薄情なのではありません。

「ゆきちゃんの中では、学校はまだ日常的な状態にあるらしくて、その、他の先生とか生徒とかが見えてるようで……」

「つまり、わたしもその幻覚症状に付き合へつてことですね」

申し訳なさそうにゆうりさんは頭を下げます。まあ、他人に話を合わせるのには吝かではありませんが。ゆきと言う子の巻き毛のような雰囲気はそのせいですか。ふーむ。すごく距離を取りたい。

ちらりと向こうの方を見てみると、くるみが二人に事情を説明しているようです。時折、ゆきと呼ばれた子が虚空に向かつて話しかけています。どうやら本当のご様子。

わたしの後ろに目を向けてるのもそのせいでしょう。わたしの後ろには誰もいません。

ここで断つても追い出されはしないでしょうが、関係悪化は必然。かと言って外へ出る選択は論外。初めから選択肢なんてものは一つです。いつだつてそうです。もう慣れました。

「分かりました。ゆきと言う子の前では新任の先生として振舞えば良いんでしょう?」

「はい。ありがとうございます」

ほっとした表情で再度頭を下げるゆうりさん。素直に礼を言えるなんて。生きてたらおじいさんに爪の垢を煎じて飲ませたいくらいです。

と言うことで、わたしとゆうりさんは設定を整えてからくるみと二人の前へ出てきます。

「初めまして。今日からこの学校に勤めることになった先生です」

無難な挨拶だと思います。

「初めまして。私はみきと言います……詳しい話は、あとでお願いします」

みきさんは大人しめな子です。最後の言葉はわたしにだけ聞こえるように言ってきました。

「初めまして! わたしはゆきって言います! よろしくお願いします!」

一番の問題児ことゆきさんは、元気のよい子供のような子です。苦手なタイプ。

それにしても、ゆきさんのその目は至って正常に見えます。認識が違うだけで、感性は普通のように感じますが。あとちよっと子供っぽい。幼児退行をされているようですね。過度のストレスか恐怖による自己防衛の一種でしょうか。

と観察していると、その観察対象はわたしの背後へ目を向けて、聞いたわたしが正常か異常かを決める第一声を放ちます。どうかまともな子でありますように。

「ところで、えと、先生達の教科はなに……なんですか?」

「……ん?」

ちよっとまって。

「あ、ご、ごめんなさい! わたし敬語って使い慣れてなくて……」  
「そんなことはいいんです。なんなら呼び捨てにして馴れ馴れしく接したところでわたしは一向に構いません。昔からそう言う期待はし

「てませんから」

「ほんとう？ やったあ！」

「そこではなく」

そう。そこではありません。両側でゆうりさんとみきさんとくるみが慌てていますが知ったこつちやありません。例え幻覚であったとしても、どのみち話を合わせるためには把握する必要がありますから。

だから一応、確かめなくては。

「その、先生達、と言うと、わたしの他に……？」

「え？ えっと、めぐねえでしょ？」

あなたが見ている幻覚ですね。

「先生でしょ？」

目の前にいるわたしですね。

「あと、おじいちゃん先生！」

……さーて。

(・ワ・)

状況を整理しましょう(二回目)。

妖精さんは人間さんじゃない人間さんがいる、と言っていました。それにより、恐らくこの時代の人類は助手さんのような人類だと仮定したので、助手さんと話す時のように認識を“広げ”ていました。

しかしそこまで広範囲に“広げ”てはいません。それではおじいさんの存在など確認出来るわけもなく、おじいさんが憑いてきている(誤字に非ず)なんて考えてもいませんでした。

「……？ どうしたの？」

目の前にいる、錯乱、幻覚症状、幼児退行の疑いがある少女。そんな子の言うことなんてものは、普段のわたしなら“はいはい(笑)”なんて思いながら軽くあしらっております。

けれども。その錯乱、幻覚症状、幼児退行の三拍子は人伝に聞いたものであり、わたし自身の目では何も確認していません。人から

聞いたことだけで憶測を並べるのは愚考だと、わたしは身に染みて実感してきたではないですか。

確かに彼女の言動は、他人から見ると不可解かつ奇妙でおかしなものに映るかもしれない。さながら狂っているようにも見えてしまう。事実わたしもそのように思っていましたからね。

しかし。彼女の目に映るものが、ただの精神的異常患者の妄想などではなく。

本当に“そこ”にあるのだとしたら……？

「ちなみにそのおじいちゃん先生と言うのは、白衣を着た白髪のお爺さんのことですよね？」

「え？ うん。そうだよ？」

はい確定。

「先生？」

「どうかしたのか？」

「えーつと……？」

蚊帳の外である3人がおろおろしていますが、今はそれに構ってる暇はありません。

取り合えず、もっと視野を広げ、耳を傾けてみましょう。なに、こんな非常事態の中ですから、わたしが“魔法”を使っても誰も咎めはしませんよ。きつと。

「——ふむ。ようやく気がついたか」

「——え？」

はい、いました。少しだけ意識を向けるだけで、見えなかった人々が出てきましたよ。

一人はお馴染みおじいさん。月で別れて以来、久しぶりに姿を見ました。感動の再会？ ないない。少しばかりの感傷はありますが、どうせのうのうと旅してるとは分かっていますから。まさかこんな所で会えるとは思いませんでしたけれど。

そして、認識したもう一人は。

「なるほど。あなたがめぐみねえ、めぐみさんですか」

「え？ うえ？」

「どーも。詳しい話は先生同士の会合で行いましょう」

「あ、はい？」

……ゆうりさんとみきさん、くるみの三人が唾然としています。これでわたしも危ない人の仲間入りなのでしょうか？ まあ仕方ありませんよね。見えない人にとっては見える人も危ない人も同じですから。

見えてる人&危ない人ことゆきさんは、幻覚と認識範囲拡大による現実の拡張が半々なのでしょうか。やっぱりおかしな人はちよつとばかり変な世界にいるのでしょうか。

「……あ、あの」

「ああ、ゆうりさん。決してわたしが変になったわけではありませんから安心して下さい」

「はあ。でも……」

「先生。おじいちゃん先生と言うのは、つまり……？」

「何がどうなってるんだ？」

「分かってます。混乱するのは当然です。なので説明はまた後で」

ゆきさんの前で話すのはまずいでしよう。

「お前はいつも問題を先延ばしにするな」

おじいさんは黙って下さい。

「あれ？ おじいさんってことは、先生たちって家族なの？」

それについても後で説明します。

「あの、どうして私が……？」

めぐみさんも後で説明するって言ったでしょ。

「ええ分かった分かりました。皆さん積もる話も聞きたい疑問も山ほどあることでしょう。それらは全て教室へ移動してから話すことになりました。はい、解散！」

とにもかくにも今は場を整えることが大事です。わたしはパンパンと手を叩き、疑問符づくめ（おじいさん除く）の皆さんを強制的に黙らせました。今なら面倒事を押し付けてきたおじいさんの気持ちが分かります。許すかどうかは別として。

生徒四人は仕方ないとばかりに、教室へ案内してくれます。その横



ではめぐみさんがおろおろしながら追従しています。そしてそれに付き従うわたしとおじいさん。

(とんでもない状況になっちゃったなあ……)

外には動く死体ことゾンビさんがいっぱい。生存者はわたし含めて五人。しかも一人は精神的に病んでいて使い物にならない。生活状態もライフラインも不明。稀に見る大ピンチ。

ですが、まあ、なるようになるでしょう。いつだってそんなものです。わたしばかりに厄介が来て、わたしばかりが動き回り、わたしばかりが損をして、そして小さな思い出を得る。そんな風に来てるんです。なら今回だってそうなるってもんです。

しかもここにはおじいさんがいて、そして、最終手段だって持ち合わせているのですから。

「……はへえ？」

白衣のポケットの中、ようやく目覚めたらしい小さな存在を確かめながら、わたしは此度もおきらくごきらくに事象解決に取り掛かるのでした。

人類は本日も、絶賛衰退中……？

「妖精さんと、がくえんせいかつぶ」

さて、何から説明したものでしょうか。

案内された教室(曰く部室のようです)の中で、わたしは椅子に座っています。目の前には子供が四人、きつと幽霊が一人。皆わたしに目を向けて言葉を待っています。

そしてわたしの隣には、同じくきつと幽霊が一人。そしてポケットには妖精さん一人。

そうですね。まずは。

「とりあえず、改めて自己紹介をしましょうか」

ここにいる全員の。

「じゃあ、まずは私から。私は“学園生活部”部長の、若狭 悠里です」

「あたしは学園生活部所属の恵飛須沢 胡桃だ。よろしく!」

「同じく学園生活部所属の、直樹 美紀です。よろしくお願いします」

「おなじく、学園生活部の丈槍 由紀です!」

上からゆうりさん、くるみ、みきさん、ゆきさんです。これが生徒四人。たぶん全校生徒。

「そしてめぐねえが……」

「もう。佐倉先生でしょ?」

「えへへ、ごめんなさーい」

「全く……初めまして。学園生活部の顧問です。佐倉 慈と言います」

そしてこの人がめぐねえこと、めぐみさん。ちよつと影が薄い人。きつと幽霊です。今まではゆきさんにしか見えていなかった様子。

「学園生活部とは?」

「学校内で寝泊りしながら、日常では触れられない様々な部署に勤む部です」

「……ああ」

話しているゆうりさんの目が、ちらりとゆきさんの方を向きました。つまり、学園生活部と言うのはゆきさんに合わせるための設定の

一つなのでしよう。

寝泊りしながら(せざるを得ない)、日常では触れられない(非常事態に触れられる)、様々な部署に勤しむ(生きるための経験を積む)部、ってことですね。分かりました。

「わたしは聞いている通り、ここへ新しく就任することになった先生です。よろしくお願いします。そしてこちらが、わたしの祖父であり、同じく就任することになった……おじいちゃん先生です」

「……どうも。孫共々よろしく頼む」

次はわたしとおじいさんの説明。おじいさんもきつと幽霊です。なので、ゆきさん、めぐみさん、わたしにしか見えていません。ですがこれで他の三人にも存在は伝わったでしょう。

おじいさんと言えば、今までおじいちゃん先生と呼ばれることが無かったためか少し神妙な顔をしています。わたしもおじいちゃん先生はないと思いますよ。

「あともう一個だけ紹介するべき存在がいますが、まあそれは今は置いておきましょう」

おじいさんを除いた全員がはてなを浮かべていますが、まあこれはゾンビさんよりも衝撃的なので後回し。もう少しだけポケットの中でじっとして下さい。

「以上で自己紹介は終わりですね。じゃあ次は……」

「はい！ はいー！」

元気に手を挙げるゆきさん。そう言えば何か言ってたような。

「先生たちは何の先生なんですか？」

「ああ……わたしが教えるものですか。そうですね。責任の追及を免れるための巧みなコミュニケーション能力とかでしょうか」

「えー？」

きつと将来役立つと思いますよ。あなた方に将来があるかはともかく。

「それで、おじいさんは……」

「そうだな。私は孫の補助として来たから、特に特化しているわけではない」

「じゃあじゃあ、何でも教えられるってこと!？」

「……そうなる」

残念ながら、ゆきさん言葉によりおじいさんの逃げ場がなくなりました。グツジョブ。

まあおじいさんくらいの学ならば、大体のことに有益な答えを返せるでしょうけど。

「おおー！ おじいちゃん先生ってすごいんだねー！」

疑うことを知らない目です。純粹ですね。毎日が楽しそうで羨ましい。

しかし、この目が絶望によって生み出された紛い物であることを、ここにいる全員が知っています。壊れた結果が幸せなら、この子は救われてるのかも知れませんがね。

けれどここに居てもらっては、少々都合が悪いのですが。

「……ねえ丈槍さん。もう休み時間が終わるけど、授業は良いの?」

「えっ！ ……あー！」

めぐみさんの言葉で、ゆきさんは悲鳴を上げながら部屋から出て行きました。

なるほど。人払いの口実ですか。タイミングが良いですね。

「この学校は、この時間が休み時間だったのですか?」

「……いや。でもゆきは休み時間だっと思ってたんだろ」

少し陰を落としながら、くるみがそう答えます。自分の中で好きな時間を変えられるとは、随分都合の良い幻覚ですね。ちよつと羨ましいかも。毎日がすごく楽しくなることでしょう。

さて、それでは。

「じゃあ、ここからはゆきさん抜きのお話をしましょうか。と言っても、わたしは実は最近になってこの現象に気がついたものでして」

「はあ? ……なんでそんな今更?」

「随分前から始まったのですけど……」

残念ながら、わたしはその時には居ませんでしたので。もっと言えばこの時代の一般常識にも精通していない自信があります。それを言うとするくややくしくなるので、今は黙っておきますが。

「まあ、ある事情によって最近の情報に疎いのです。そう言うわけでわたしには知識が足りません。なので……教えてくれませんか？  
このゾンビ騒動を」

(・ワ・)

三人からの情報によりますと。

このゾンビ騒動は急に始まったものらしく、原因も被害範囲も不明。分かっているのは、ゾンビさんに噛まれてしまったら自らもゾンビさんになってしまう。そのせいでここら付近に生存者はゼロ。生き残ったのはゆうりさん、くるみ、みきさん、そしてゆきさんの四人だけ。

そして見えない一人からの情報によりますと。

これは生物兵器によるバイオハザードなるもので、もともと想定されていた事態であり、この学校は有事の際の拠点として機能するように作られていること。一連の事件の元凶としてある企業が疑わしいとのこと。

なんと言いますか。

(自然災害だったらどれだけ良かったことか……)

陰謀の匂いがします。めっちゃくちゃします。人様が起こした騒動ほど片付けるのがしんどいんです。元凶は元凶で解決する必要がありませんし。帰って寝たい。

いや別に、これを解決する義務も責務もないわけですから、全部無視して元の時代に帰還しても良いんです。しかし、これを解決しなかつたら、この四人はゲームオーバーになっちゃうんですね。

いくらインフラが整っているとは言え、物資は供給しない限り減り続けるものです。たった四人の生産速度では追いつくはずがありません。いずれ限界が来ます。待っているのは飢死でしょう。

それまでに助けが来る？ そう希望を持つのもいいかも知れませんがね。しかし、そんな安直な展開が望めるほど現実は甘くありません。人為的に引き起こされたものなら尚更です。現に今まで助けが

来なかったではないですか。

わたし？ 迷い込んだ哀れな子羊です。早くエデンへ帰りたいたいです。

(しかし、妖精さんのことを話すのは絶対に必要なんですよ……)

それにそもそも根本的な問題、まだ妖精さんの存在を話してはいませんでした。わたしたちの説明も、めぐみさんが見えることも説明しなければなりません。

シンプルに結論を言いましょう。わたしがすぐに帰還するにしても、どう動くにしても、わたしたちと妖精さんの事を説明するのは確定です。話さない選択肢を選ぶには、あまりにも不可解な点を残しすぎました。

「大体の事情は分かりました。ちなみに、人類が手軽に月に行けたりはしますか？」

「少なくとも、そんな技術が生み出されたなんて話は聞いたことがありますけど……？」

「なるほど。別に衰退期に入った訳ではないようですね」

本日何度目かのクエスチョンマークの付いた顔。そろそろ疑問点を尋ねてくる頃。

しかしいちいち答えるのも面倒なので、もう自分から全部喋ってしましましょう。

「出てきてよし」

「よばれてとびでたー！」

ポケットからぽいつと投げると、それは面白いように跳ねてテーブルの中央へ着地。

そして、痛いくらいの沈黙が数秒。

「……わ、わああ!?!」

「なんだこいつは!」

「こ、小人!?!」

「お、お化けですか!?!」

意外にも、一番驚いているのはゆうりさんでした。椅子から飛び退って悲鳴を上げています。こう言うのには弱いのでしょうか。

そして最も警戒しているのがくるみ。背負っていたシヤベルを両手で持つて構えています。シヤベルって武器として使うものでしたっけ？

よく観察しているのはみきさんでした。小人ですか。ぱつと見だすとそう見えますよね。

あとめぐみさん。お化けはあなたですよ。

さて、そんな彼女らの驚愕と警戒と興味を向けられた妖精さんとはと  
言えば。

「ひやああく……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

がくがくと震えて失禁していました。ちなみにほぼ真水なので、そんな汚くはありません。まあ、生理的に無理と言われればそれまでですが。

そのあまりの情けなさに、場は困惑と言う名の沈黙へ逆戻り。口を挟むならここです。

「後回しにした自己紹介をしておきましょう。彼は妖精さんです」

「よ、妖精？」

「いえ、妖精さんです。妖精だけだとちよつと違う存在を指しますの  
で」

「……………妖精、さん？」

「そうです。妖精さんです」

「あはーいー！」

よし。丁寧にごり押せば納得させられる！

「そんなわけがあるか。ちゃんと説明しろ」

おじいさんに怒られてしまいました。仕方ありません。

「まあ、皆さんにとっては、分からないことが全てだと思うので…………と  
りあえず、わたしたちが何者で、どこから来たのかを、まるつと説明  
しようと思います」

「……まるで全く知らない場所から来たみたいですね」

「事実その通りだと思いますよ。だから、そう。お決まりの言葉も付け加えておきましょうか……信じるかどうかは、あなたたち次第です」

さて、わたしの話を信じてもらえるかどうか。信じてもらえなかったらゆきさんと同じ扱いです。信じた場合でも、それによって皆さんがどんな反応を起こすか。異物として排他する？ それとも利用する？ 考えすぎなどはありません。学舎ではそうでしたから。

それに、この異様な現状で何日も何日も立て籠もって、外のゾンビさんたちと、ゆっくり減っていく物資の量。二つの恐怖の板挟みになって、まともな精神など保ってられると思えないんです。

正直に言ってしまうえば、思いつきり壊れているゆきさんの方がまだ安堵出来るのですよ。関わり合いたいかどうかは別として、少なくともストレスは溜め込んでいませんから。

この中で最も警戒すべきなのは、落ち着いて見えるゆうりさん。彼女です。年上故の疲れと言うものは、よく知っていますから……わたしも昔は爆発してましたっけ。おほん。

ともかく、わたしはどんな反応が返ってきてもいいよう、最大限警戒しながら話すのでした。

(・ワ・)

約一時間。わたしが身の上話に費やした時間です。

話したことはと言えば、現時代にとつての未来から来たこと。未来では人類が衰退したこと。“わたしたち”が人類に成り代わったこと。そして、新人類となった妖精さんについて。

途中幾つかの質問があつたとは言え、情報が与える影響を考えてかなり端折って説明したのですが。人類史の一端を説明すると、これくらい時間は掛かるものなんですかね。

「……つまり」

難しい顔をして黙りこくってた三人の内、みきさんが最初に言葉を



発しました。

「あなたは厳密には人類ではなくて、末期だった未来から来て、そこでは妖精さんが新しい人類になっていて、あなたは妖精さんのせいでこの時代に来て、今に至る、と？」

「概ね間違っていないですね」

「……にわかには信じがたい話ですが」

ちらりと横目でテーブルを見ました。

「ぼくたちしんじられぬです？」「なにゆえ？」「いきなりすぎたのでは？」「ぼつとでたからですな」「ぼつとでのくせにー」「もりあげるためにでて」「いらなくなったら？」「ぼいっ」「それいいかも」「いいぶらっくかげん」「でもしんじられぬとおかしもらえないのでは？」「そうかも」「そんなー」「いやー」「しんじてー」

お菓子が好物との情報を聞いて、ゆうりさんが棒菓子を与えてみたところ、妖精さんは大変お気に召したようで、わちゃわちゃと増えました。確かに、こんなほのぼのした小さな生き物が新人類だなんて、普通は信じませんよね。

「……質量保存の法則を無視してぼんぼん増えている以上、その話も否定できませんね」

おや、結構信じてくれてる？

「みき。あんまり疑うのは良くないぞ」

「でも、疑ってしまうくらいには突拍子も無い話ですよ」

「私たちはもう既に、突拍子も無い状況に陥ってるでしょう？」

「それは、そうですね……」

くるみもゆうりさんも擁護しています。いや、妖精さんに関してはゾンビ現象以上の、かなりとんでもない話だと思うのですが。

「確かに驚きの真実ですが、ここでそんな嘘を吐くメリットもありませんし」

「それに、妖精さんの存在はそれで納得できるからな。あたしは先生を信じるよ」

「……分かりました。取り合えず、必要以上に疑うのは止めることにします」

……もしかして、この子たちってすごく良い子？

と、一瞬思いかけてましたが、よくよく考えてみればこうなってもおかしくはないのです。ゾンビの居るこの状況で、妖精さんと言う非常識を前にして、未来から来たと言う話。あり得たっておかしくはありません。

それに、少しだけ追い詰められていることも起因しているのでしょうけれど。この子たちにとっては、生存者は同年代の子供、たった四人だけだったのですから。ゆきさんのようにめぐみさんがいるとは知らないのなら、四人だけと言う現状が精神的に作用していても無理はないでしょう。

「それで、さ」

そうです。そんな三人の目の前で、めぐみさんの存在を仄めかす言動を取ってしまったのです。さぞや衝撃的に映ったことでしょう。そして、さぞや疑問に思ったことでしょう。

「最初に出会ったとき、めぐみさんのこと、見えてる風だったけど……どう言うこと？」

勿論、それが質問として飛ばされるに決まってるじゃないですか。あのときの自分を呪いたい。もう、わたしのばかり！

身近な存在に関することだからか、三人が今まで以上に真剣な目で見てきます。気まづくなつて目を泳がせます。自然と、さつきまで存在を忘れていためぐみさんの方に目が行きます。彼女も自身が見えることに疑問を持っていたようで、静かにわたしを見返してきます。おじいさんも見守っています。見守ってないで助けてください。

こうなつては、答えないわけには行きません。

「わたしが、人類に成り代わった種であることは聞いての通りです」

「え？」

「祖先がなぜこんな戦争ばかりの欲張った種族に憧れたのかはさておき」

……皆さんなんて微妙な顔をするんですか。ここ笑うところですよ。

「わたしたち」は人類に良く似ていますが、それでも人類そのものではありません。本質的に違いますから、その性能にも差異が生ま

す」

「今はそんなことを聞いてるんじゃない……！」

「きゃー!!」「ひゃー!!」「にゃー!!」

「くるみ! 落ち着いて!」

立ち上がったくるみをゆうりさんが宥めます。怒声により妖精さんが丸まってしまいました。まあ、誰だって関係ない話をされたら怒りますよね。でももう少し我慢してて下さい。必要なことなので。

「ところで、人ってなんでしよう? どんな存在が人だと思いますか?」

「え、つと……人型で、知能があつて、心があるのが、人、でしょうか?」

「まあそんなところでしょね。じゃあ、外で動いているあれらは人でしょいか?」

「……もう、人じゃねえんだらうな」

暗い雰囲気。心に闇を持ちすぎです。

「では、人は魔法を使えるでしょうか?」

「魔法?」

「そう。不思議な力。超能力でもいいですが、それは人が使えるものとしてありえますか?」

「……人が魔法なんて、使えるわけありません」

「そうです。そして、そこがわたしたちと人類の差異です」

胡乱な視線を向けてきます。失礼な。真面目に話しているんですよ。

「わたしたちは、魔法が使えました。けれどそれは人類ではありません。なので捨てたんです」

「なんで? 魔法って言うからにはすごい力なんじゃないの?」

「それだけ人類に憧れていたんでしょ。わたしたちは子供から大人になるまでに魔法を捨て、そして魔法を持っていたことすら忘れます。わたしも最近は忘れていましたが、必要に応じて知りました」

「……その、魔法って言うのは?」

「万物と対話して、相手が何を伝えたがっているかを理解する……よ

うはただ話すだけのものですよ。人と、物と、現象と。場合によつては幽霊とすらも」

幽霊じゃないかも知れませんが、幽霊ってことで通します。

三人はようやく、自分たちの疑問についての答えを把握したようです。そして大きな衝撃と希望を持って、くるみが震える声で問いかけてきました。

「その魔法を使ったから、私たちには見えないものが見えるってこと？」

「そうです」

「じゃあ、いるのか？ めぐねえが……？」

「はい。めぐみさんは、ここにいますよ」

「……そう、だったんだ……」

呆然と立ち尽くし、放心状態となつていているくるみとゆうりさん。まだ半信半疑の目を向けるみきさん。そして静かに佇んでいる、三人には見えない人。

正直、これを聞いたところでどうにもならないと思つたんです。どつちにしろ見えず、聞こえず、分からないことに変わりはありません。ただ存在することだけを知りながら、認識すら出来ないなんて、とても辛いことでしょうに。

「本当に、佐倉先生がそこにいるんですか？」

「めぐみさんについての情報を話せばいいのでしょうか？」

「……お願いします」

みきさんの要求に、わたしはめぐみさんを見ます。彼女はこくりと頷いて、自分について三人が知っている限りの情報を話してくれました。それを口に出すと、みきさんもやっと信じたのか、一言の謝罪と共に黙つて顔を俯かせました。

それからわたしは淡々と、めぐみさんから三人へと言葉を仲介しました。わたしの仕事は、物事の間を取り持つ調停官ですから。責務を果たしませんとね。

しかしなるほど。めぐみさんの存在を教えたのは良かった事なのかも知れません。幾度も言葉を交わす内に幼子の如く泣き出してし

まった三人を見ながら、わたしは、そこに“いる”と知ることが出来ただけで救われる人もいるんだなあと、そう思いました。

何を語ったのかって？ それは忘れました。もとよりこれはめぐみさんと三人の会話です。部外者であるわたしが覚えている必要ありません。さつさと忘れるに限りません。

……でも、そうですね。一つだけ覚えていることは。

涙交じりに聞こえた、四つ分のお礼の言葉だけは、確かにちやんと受け取っていますよ。

(・ワ・)

「……………」

「……………」

「……………」

仲介が終わり、三人が落ち着くまで待つて、またも一時間が経ちました。

落ち着いたは良いのですが、落ち着きすぎです。と言うか、これは羞恥で黙ってますね。見ず知らずの他人(わたし)の前で不覚にも涙を見せてしまったのですから、そりやあ恥ずかしがるのも無理はありません。

と言えども、こう沈黙されてはわたしも気まずいのですが……

「ふむ。しばらく動かないようだな。お前はそのまま黙って立っていないかい」

あ、そう言えばいましたね。おじいさん。

おじいさんが黙って立てと言ったので、わたしは全部放って傍観に徹します。何もしなくて良かったとか、そんなことは思っていないませんよ？

おじいさんはそのままめぐみさんへ向き直ります。めぐみさんは微笑みながら三人を見ていましたが、おじいさんの視線に気付いて首を傾げています。

「めぐみさん、と言ったかな」

「はい。そうです」

「単刀直入に聞くが、君は死んだのか感染したのか、どっちだね？」

わーお、ど直球。

問われたためぐみさんは目を丸く見開いています。可哀想に。しかし律儀に答えてくれる様子。

「……感染しました」

「本体は？」

「恐らく、地下二階にあると思います」

「そうか……次の質問だが」

物憂げなめぐみさんの答えをばつさりして、次の質問とのたまってます。相変わらずひどい祖父です。

「君はどれくらいがオリジナルで、どこまで補完されているのかね？」

……？

「この馬鹿者は気付いていないらしいがな。感染した者の霊的とも言わべき残留意識が認識出来るなら、私の孫には君以外にも感染者の霊が見えるべきだろう」

……！

確かに、ゾンビさんの生前の意識が認識出来ているなら、今の段階でめぐみさん以外にも沢山の姿が見えている筈です。ですがそんなもの、どこにも見当たりませんでした。

めぐみさんもゾンビとなったなら、なぜめぐみさんだけが見えるのでしょうか？

「私は、ゆきと呼ばれた子の影響によるものと考えている。感染した者の意識は消え、その心もある程度の破損が起きるのだろう。肉体と精神が揃って崩壊したなら、心は器から漏れ出でて、外へ拡散してしまう」

なるほど。わたしたちの魔法は器に収まらないため、外部へと放出されて消えました。ゾンビさんになると器自体が壊れるため、心までもが拡散する、というわけですね。

めぐみさんの影が薄い理由もそこにあるのでしょうか。おじいさんと比べて存在感が希薄なのは、めぐみさん自体の存在が薄くなってい

たから。純粹な存在ではなかったからです。

そして、その薄い存在を一個とするために水増しされたのが、ゆきさんの想い、ですか。

「彼女は恐らく、君を望んでいた。強い渴望だったのだろう。その想いが彼女の精神崩壊によって起こった現実の拡張により、君の希薄な存在を彼女が補完と言う形で埋め合わせた……と、私はそう考える」  
ふーむ。流石おじいさん。こう言った推論では、残念ながらわたしでは敵いません。もとから頭は良かったのですが、世界中を放浪している内にもつと高度な生き物になったようです。

終始呆然と聞いていためぐみさんは、おじいさんが話を締めくくると素直な感心の声をあげました。

「……すごいですね。そこまで考えられるなんて。私はちつとも分かっていなかったのに」

めぐみさん自身のことなのですがね。めぐみさんにとって、自分の出自などはもう“終わってる”ことだからか、少々無頓着なように思えます。

めぐみさんは胸の手を当て、記憶を確認するように目を閉じ、答えました。

「……私は半分が“佐倉 慈”で、もう半分が丈檜さんの思い描いた“めぐねえ”です。佐倉 慈が持っているのは生前の記憶。めぐねえが持っているのは、丈檜さんの私に対する想いと……現実を受け止めるための緩衝材、と言うべきでしょうか」

「彼女は現実を受け入れられなかった。だからこそ、君に現実を託したのか」

「はい。普段は教師として丈檜さんたちの傍に居ますが、私は彼女が受容できない現状を見て判断し、彼女に受け入れられる形で伝える役目も持っています」

……それって何気にすごくないでしょうかね？

精神的に脆い人はやはりいます（わたしの周りにはいませんが）。それはそう簡単に鍛えられるものではないでしょうし、鍛える手段も限られている上に、効果があるかどうかは人それぞれ。脆い人はずっ

と脆いものです。

必要なのは、その脆さをいかに上手くカバー出来るかだと思うんですよ。ただの狂人は脆い心を守れずに壊れてしまった人ですが、ゆきさんはその点で言えばかなり上手くやっています。

偶然と必然が重なった結果とは言え、こんな阿鼻叫喚の現状を受け止める盾を用意し、現実逃避によって自己を守りながらも、間接的に現状を受け止めて思考する精神構造を構築したのは素晴らしいと思います。妖精さんと接するのに最適な心構えじゃないですか。すごく羨ましい。

「大丈夫なのかね？　以前と違う自己と言うのは、そう簡単には受け入れられない気がするが」

「受け入れられないだなんて、そんな！　私はこれで良いと思っていますし、むしろ嬉しいと思っています。丈檜さんのおかげで、私は死して尚、四人の子供たちを見守ることが出来るんですから」

そう言って微笑むめぐみさん。とても綺麗な人ですね。

わたしの周りには、ここまで純粋な善の心を持って接してくれる大人はいませんでしたから（局長とか局長とか、あと局長とか）、めぐみさんのその献身の心は大変好ましく思います。

ああ、わたしだって別に感心しないわけではないわけではありませんよ。他人に向けられた真心は素晴らしいものだと思います。わたしに向けられると途端に裏を読んではしまうだけで。

わたしが久しぶりに美しい心と言うものに触れていると、おじいさんが言いました。

「ああ、感染した者は別に死んではいけないぞ。そもそも死体が動くわけないだろう」

「えっ」

……はい？

「確かに感染した者の肉体は損傷しているが、あれは別に腐っているわけではない。お前、腐臭を感じたか？」

確かに、今まで腐った臭いを感じたことはありませんでした。ですが、体は見てられないほどにボロボロだったので。四肢が欠けて



いる者もいましたし。

「四肢が欠けた程度では簡単に人は死なん。生きるだけなら問題ない」

いや大有りでしょう。

「それに、死体が動くなどと言うファンタジーじみたことが起こる筈が無いだろう」

先ほど心だの霊だのと言ってたのはおじいさんですよ。

「ともかく、感染者は生きている。以上」

衝撃発言をしたおじいさんはなんのその。どこ吹く風です。なんですかその後は自分でどうにかしろと言う目は。いつもの丸投げじゃないですか。言いたいだけ言って満足しないで下さいよ。

発言したい気持ちを全力で抑えながら、めぐみさんが復帰して質問するのを待ちます。おじいさんもめぐみさんの問いには答えずにいられませんまい。

「…………おきます」「…………おきたー?」「…………あとぐせいきー」

完つ全に忘れてました。丸まっていた妖精さんのことを。

起きてしまった妖精さんの言葉によって、三人が再起動を果たしてしまったようです。

「…………そ、そうだ! まだ話は終わってなかった!」

「は、はい! 質問が残ってます」

「そ、そうでした! 先輩がめぐみさんの姿を認識できるのはどうしてですか?」

それ今出た話題です。固まってるって時間の進みも止まるのでしよ  
うかねえ?

もちろん、こんな事態になってしまっただけはおじいさんを問い詰めることは出来ません。めぐみさんも質問の期を逸してしまっただけで、視線がそわそわとおじいさんと三人の間を行ったり来たりしています。が、おじいさんはやはりそ知らぬ顔。妖精さんがそろそろ起きてくると分かっていたのです。周到な…………!

わたしは結局、おじいさんの言葉は後で考えることにして、今は三人に先ほど聞いた推論を語って聞かせるのでした。

(・ワ・)

掻い摘んで教えると、三人は少し落ち込むように顔を俯かせました。

「ゆきが、めぐねえを繋ぎ止めてくれたのか……感謝しないとな」  
「それに、謝らないといけないわね。めぐねえのこと、ちゃんと伝えていたのに」

「でも、改まって謝っても、ゆき先輩は混乱するだけだと思いますよ……だって、先輩にとつては、その、めぐねえといるのが普通で、私たちもそうだと思うてるんですから」

「……なんか、歯がゆいな。気持ちを伝えたいのに伝えられないって」  
「そうね……でも、例え一言でも、気持ちはちゃんと伝えた方が良くと思うわ」

暗い。暗いですよ。三人が真剣な話をすると、どうしても暗くなるんでしょう。もしかしてゆきさんがムードメーカーだったりするんでしょうか？ イメージにはピッタリ合いますが。

そんなことを思っていると、三人は今度はわたしの方を見て気まずそうにしています。はて？

「先生。じゃあ、あの、ゆきちゃんと言ったおじいちゃん先生って言うのは……？」

「ああ、はい。わたしの祖父です。旅先でなんか生命活動を停止してました」

「……え、えっと、その……ごめんなさい……」

別に謝る必要はないですよ。どうせ近くにいますし。

さて、そんな説明をしている間に、この場にいる者たちの状態を説明しましょうか。

まずはくるみ、ゆうりさん、みきさん。各々黙って思索する表情を作っています。色んなことが起き過ぎて、子供には少々刺激があり過ぎましたからね。

次にめぐみさん。彼女は静かに傍観者を決め込んでいます。三人

に対して、自分のことはいつもと同じように扱って欲しいと頼んでいました。混乱をさけるためでしょうね。わたしとしてはメツセンジャーの仕事が減って……おっと。

わたしたちとは言えば、学園生活部の指示待ちです。現地での行動は詳しい人に任せて、わたしたちはそれに乗っかる形で動くのが一番です。決して、面倒くさいとかそういう理由ではないです。

はて？ 何か忘れているような？

「……あ」

そうです。再びすっかり忘れていた存在がありました。目の前にいるのに、こんなにも影が薄かったのは初めてではないでしょうか。

それはきつと暗い話ばかりしていたせいで、彼らの入り込む余地が無かったからです。

「……われわれ、くうきでは？」  
「くうきっておいしいの？」  
「おいしいとおもうきもちのことです？」  
「おいしそうとおもうきもちのことです」  
「こじんてきなかんそうですな」  
「こじんのいしなごいにかいさず」  
「そのそんざいをむしされる」  
「それがくうきでは？」  
「ほうちですかー」  
「あたらしいかんじ」  
「いいかんじ？」  
「では」  
「ほうちにもとづいて」  
「はたりますか？」  
「でもおさきまっくら」  
「はたらけない……」  
「くらい……」  
「めいる……」  
「しよんぼり……」  
「むしはいやー……」

ああ。今まで無視されてきた妖精さんたちが、暗い話を聞き続けて鬱雲を発生させていました。

どうしましょう。可哀想ですが、もう少しだけ放っておきましょうか？ でもそうしたら鬱のあまり暴走を始めそうで怖いんですが……

「あの、先生」

と、ここでゆうりさんから質問です。

「先生は、その……いつまで此処にいられるのでしょうか？」

「……えっ、と？」

早めに帰りたいです。

の言葉は、三人が必死に隠そうとしている瞳の揺らぎを見て引つかかってしまいました。どうしてそう、答えにくくなるような表情をす

るんですかね。Yなら「上目使いだどっ!?」と言いながらコロっとOKを出しそうです。身長的に上目になるのは当然でしょうに。

一度詰まった言葉は中々言えないものです。あれこれと説明文を組み立てていると、ふと、一つの素晴らしい提案が浮かび上がりました。

そうです。帰れるかどうかは妖精さん次第です。なら妖精さんに聞けばいいのでは？

「妖精さん」

「……およばれ?」「およばれですな」「こたえるのがれいぎかと」「ならばわたしが」

制服姿の妖精さんが前に出てきます。彼らに問うてみましょう。

まあ、頼めばすぐにでも帰してくれるでしょうが、それをわたしの口から言うのは……ちよつと度胸がないですね。生存者だと思っていた分、きつと深く落ち込むことでしょうし。

ちよつとでも助けられることがあったら助けようかな、なんて考えながら。

「わたしは帰れますか?」

「むりですが?」

「え」

ちよつとばかり衝撃的な言葉を受けて乙女にあるまじき声を出してしまいました。

……待て。待って待って。

「……無理、とな?」

「むりですなー」「きたいにそえず」「むねん」

「ど、どう、どうして……?」

「このままかえるとかえれなくなります」

帰ると帰れなくなる。まるで哲学じみた難題のように、それはわたしの前に立ちはだかりました。帰ると帰らなくなるとは、帰ろうとしなければ帰ることが出来るわけで、でもそれで帰ろうとすると帰れなくて、それを變えるには帰ろうとしないことで、しかしそれだと帰れる意味が無くなってでもやっぱり帰ると帰れなくなつて帰るために

は帰るを変えてかえるです？

「……かえれないです？」

帰れない。妖精さんの口から不可能の言葉が出たことに、わたしは目の前が真つ暗になる気持ちでした。もしかしてこのままずっと、元の世界には戻れない？ 助手さんたちにもう会えなくなる？ わたしの人生はここで野垂れ死に？

ぐるぐると回る恐ろしい思考を止めたのは、意外にもおじいさんでした。

「落ち着け。じっくりよく考えることだ。お前が何をすべきか、考えれば分かるだろう」

おじいさんはそう言ってきました。なんか、冷静ですね。

「おじいさんは、どうしてそう落ち着いてるんですか？」

「私はどうするべきか知っているからな」

……えっ。

「とは言え、これも良い経験だろう。しばらくここで生活してみると良い。いずれお前も気付くはずだ。どうして此処にいるのか。そして何がおかしいのかを」

そう話すおじいさんの目は、どこか面白いものを見るような目で。そう、これはいつもの無茶振りを吹っかけてくる時の表情です。悲観にくれる孫を見てせせら笑っているのです。いつものことですねー。ですがまあ、落ち着くことは出来ました。おじいさんが帰る方法を知っているなら、別に問題は無いんです。帰ることが出来るなら、此処で生活することぐらい平気です。帰れなくなったわけではありませんが。

「……いつか、帰れるようになりますか？」

「じょうきょうようしだい」でも「われらもがんばりますゆえー」

「分かりました。では、わたしも帰れるように頑張ってみるとしましょう」

さしあたって、まずは滞在許可を取りませんとね。先ほどまで帰る気だったわたしとしては、少々の後ろめたさと恥ずかしいものがありますが。そこはぐっと抑えて、努めて平然と申し出の言葉を口にしま

す。

「と、言うことなので……無期限の滞在、お願いできますかね？」

それは三人の笑顔と共に迎えられる。

わたしは学園生活部の副顧問として、名実共に学校の先生をするこ  
とになりました。

(・ワ・)

計算し直す必要があるとのこと、ゆうりさんが家計簿を持ち出し  
て物資の量計算を始めました。彼女は学園生活部における母親  
のような存在で、物資の消費を計算してやりくりしているそうです。

妖精さんと戯れているのはくるみ。力仕事担当です。バリケード  
の管理、荷物の運搬、そして感染者の排除まで。シャベルが愛用品。  
得物ってことですね分かります。

そして、そんな説明をしてくれるのがみきさん。部における助手担  
当で、大体のことはそつなくこなす器用な人。彼女だけ年下なので、  
一歩下がって全体を見てるような気がします。

そして。

「たっだいまー！」

今授業から帰ってきたのが、部のムードメーカーことゆきさんで  
す。ムードメーカー……と言うより、彼女があるからこそ、今までの  
生活で彼女らの心が折れることがなかった、と言うべきでしょう。良  
くも悪くも思いつきりはつちやけている子です。

……そう言えば、妖精さんのこと、話してなかったような。

「おー、お帰りー」

「お帰りなさい」

「先輩。お帰りなさい」

「うんうん。今日も部活頑張るぞ〜！ ……うん〜」

ゆきさんの視線が、シャベルの上の妖精さんに止まります。

妖精さんも、シャベルの上からゆきさんを見ています。

じつと見つめあう両者。部室内に訪れる緊張。そして最初に動い

たのは。

「……か、かわいい〜！」

駆け寄って妖精さんに抱きついたゆきさんでした。あれ、思ってた反応と違う……

急に抱きつかれた妖精さんは、驚きながらもなぜかポポポンと増えてます。

「にやわー」「うらやましー」「あらたなにんげんさん？」「たのしそう？」「おもしろそう？」「ふたつともなの」「いいにんげんさんかしらん？」「わるそう？」「んにゃ」「じゃあいいのでは？」「いいにんげんさんですな」

「ねえねえみんな！ 可愛いよ！ この子たち可愛いよ！」

「はいはい。分かったから落ち着けて」

「だって可愛いんだもん！」

妖精さんが増えた理由も分かります。ゆきさんは子供のようにはしゃいでいて、とても楽しそうです。いかにも妖精さんが好きそうな子ですよ。

その微笑ましきから、部屋に和やかな空気が流れます。なるほど。確かにゆきさんは精神的な柱ですね。彼女が加わっただけで、全員に笑顔が生まれました。彼女と妖精さんがいれば、この状況も何とかなると、そう思わせてくれる何かがあります。

「えへへ〜……あれ？ でもこの子たちって、一体？」

……とは言え、落ち着けば疑問が生まれるのも当然のこと。キョトンと首を傾げたゆきさんに、何を説明すべきか考えながらも、わたしははあ、と憂鬱のため息を吐くのでした。

昔から、副と名のついたものは一番よく働くものと相場が決まっているようです。わたしもどうせ、人一倍働くことになるんでしょうね……とほほ。

人類は本日も、絶賛衰退中……？

「妖精さんと、いちにちのおわり」

とりあえずゆきさんには妖精さんの存在だけ話して、一通りの説明は終わりです。なんだかんだで四人と親睦を深めることに成功しました。好感度が高いと言うのは、教師と言う立場からすれば一番良い状況です。四人の性格も含めて、ABC三人を教えていた時のような悲惨なことは起きません。なんて気楽な役職でしょう。ゾンビさんを除けば。

いや、そうですね。生きていると分かった以上、ゾンビと言うのも語弊がありますので、これからは感染者と言い換えておきましょうか。しかし生きていたのは。倫理的に扱いが面倒になりました。

考えることは山済みですが、一先ずただ談笑していたい。これが現実逃避。でも全然逃避出来てない気がする。ゆきさんに後で上手い現実逃避のやり方を教えてもらいましょうかね？

「みんなく！ うごけないよ！ 助けて〜！」

「本当にほんぽん増えるな……」

当のゆきさんは妖精さんに纏わりつかれています。やはり相性がいい模様。

「見てるだけで癒されるわね」

「はい。何だか和みますよね」

そりゃあそうでしょうよ。ざっと数えても20人以上はいますもの。極度の危険はただのスリルに成り下がります。何でもありの状態です。何かの切欠で暴発すれば、ある意味危険になります。

とは言え現在はそんな様子もなく、ゆきさんを相手にわらわらと楽しんでる状態です。楽しい人間の近くであれば、何もなくても楽しくなるようです。

「てんぐー」「ぐくらぐー」「ゆめぐーちー」「ここにはゆめがちやんとあるー」でもきぼうは「ありや」「じゃ、つくりますっ？」「つくるって？」「きぼう」「それもいつきょう」「でもどうやって？」「そもそもきぼうとは」「ごじんによりけり」「きぼうがわからぬ」「きぼうをよそう？」「きぼうてきかんそく？」「きぼうをきぼう」「にんげんさん」



「あなたたちが希望のようなものですよ」

「おおー」「なんと！」「われわれが」「おおきなきたい」「せおつてるっ」「ぷれっしやーです」「おしつぶされそう」「がくがく」「ぶるぶる」

暴発しないように言葉を選ぶのも一苦勞です。危険もスリルもパニックもありません。

そんなこんなで、予期せず消費者がぼんぼんと増えてしまったわけですが、ゆうりさんがそれに対して一つの不安を口にしました。

「食量はどうしたものかしら……」

「その点は大丈夫です。妖精さんはお菓子などの嗜好品しか食べません」

「お菓子ですか……それもそれでストックが少ないんです」

これだけの妖精さんを賄うお菓子は無いとのこと。まあ、サバイバルに必要な食料以外が充実しているとは思っていませんでした。あるだけましでしょう。

しかしそれでも、足りないことに変わりはないわけで。

「おかしなし？」「たべたし」「でもなし」「どうする？」「じゅようときょうきゆうがどーのこーの」「かんたんによーと？」「あぶれものがです」「どえりやいこつちや」「どないしよーか？」

「需要量が過多ならば、需要量を減らせば良いのでは？」

「それだ！」「さすが」「たよりになりますなー」「じゃあそれで」「じゅようりょうをへらします」「ほうほうは」「たべるひとをすくなくすればいー」「それは」「つまり」「まびき……？」「……」「……」「……」

妖精さんの間に激震、走る！（ミステリ風）

しかしいきなりプラッタなんて御免です。

「つい消滅すれば良いのでは？」

「あ」「そか」「なるほどなー」

「え？……あー！」

わたし以外の皆さん（きつと幽霊二人は除く）の頭の中に、妖精さんがぼぽぽーんが入っていきます。傍から見るととんでもない光景ですね。ですがこれで妖精さんの数は減らせましたし、生徒四人の安

全も確保されたので一石二鳥です。

「あ、頭、頭の中に！」

「なにがどう、うえ!？」

「い、一体どうなってる!？」

「妖精さんが、消えちゃった！」

パニックです。失念してました。うっかりうっかり。

物質と反物質が衝突すると、互いの質量が全てエネルギーに変わり消滅します。これを対消滅と言います。詳しいことはおじいさんに聞いてください。

それとは全く関係ありませんが、妖精さんは神話や伝承と言った物語の中に入ることができ、これをつい消滅と言います。記憶も物語としてOKなようで、妖精さんは時々人の頭の中に入って遊ぶことがあるようです。別に害はありませんのでご安心を。

そんな感じで補足をする、皆さんは安心した様子で胸を撫で下ろしました。

「妖精さんってつくづく不思議な生き物だな……」

「ええ本当に。わたしたちでも手に負えません」

「未来ってすごいよね……」

失礼な。こんなトンデモ、ありえませんが。

なんか字余りながらも一句できてしまいました。未来はむしろ、この時代より退化しています。妖精さんと発掘された古代技術が凄いただけですよ。

わたしからすればこの時代の方がすごいです。例えば、この事態を引き起こした生物兵器を筆頭に、車だのコンクリだの太陽光発電だのと、そう簡単にはお目にかかれないものがゴロゴロ転がっています。それに食べ物も保存食なのに品揃えが豪華です。しかも品質も良く、たった一手間加えるだけでまるで出来たてほやほやの温かいクリーミーなシチューに……

「……あれ?」

「では、いただきます」

「いただきますーすー!」

気がつけば夕ご飯が用意されていました。ごちそうさまでした。美味しかったです。

(・ワ・)

なんと、この学校にはシャワーまで完備している模様。校舎にあるまじき豪華さ。避難施設として機能すると言うのは本当のようですね。浴槽がないことだけが、唯一残念な点です。

そうしてシャワーを浴びて、着替えは妖精さんをお願いしました。背が高いってこう言うときに不便ですよ。校舎内の服ではサイズが合いませんでした……太ってないですよ？

「あれ？ その服はどこから持ってきた？」

入れ替わりで来たくるみに感づかれてしまいました。

「ああこれですか。妖精さんに頼んで作ってもらいました」

「へー。妖精さんって便利なんだな」

「いいえ。目的に利用するために、それ以上の労力を払う危険な賭けです」

「はい？」

「この服の性能、聞きます？ 多分驚くと思いますよ」

耐水、耐塵、耐刃、耐弾、耐火、耐電、耐放射線、耐その他諸々の性能を持った服ですって。誰がそこまでやれと言った。わたしは普通の服で良いと言ったのに。防じゃなくて耐なのがポイント？ なおたちが悪いです。見た目は普通だから？ 中身も普通にして下さい。

しかしこれでも抑えた方なんですよ？ 最初は“かるな”さんとやらが持っていたと言う見るからに仰々しい鎧を作ろうとしてましたし。それに、これだけの性能も目には見えませんからね。まだまだともな内です。

とそのようなことをつらつら話してみると、くるみは微妙な顔をしています。

「大は小を兼ねるって言うし、別にそんな慌てるようなことじゃない

んじゃないの？」

ああ、まあ、知らない人はそう思いますよね。うん。

「……妖精さんはお菓子好きですよね」

「？ そうみたいだけど……」

「わたしも妖精さんたちのためにお菓子を作っていたりします。でもご存知の通り、妖精さんは増える場合はとことん増えるものなので、必然的に手が足りなくなります。その時ふと妖精さんに漏らしてしまっただけですよ。わたしがもう一人いたら良いのになって」

「……それで、どうなったの？」

「わたしのクローンが生まれるところでした。最終的にタイムパラドックスが起きてわたしが何人もいる状態になりましたよ。下手をすれば矛盾が作用して消えてたんじゃないですかね？」

「……………」

実際は矛盾による負債を犬の形にして出す(Time Paradox)ことで解消してました。当初はわけが分からずにスルーしてましたが、あれつて今考えるとものすごい危険な橋を渡ってた気がします。時間なんてもう二度と手を出したくない。あ、今現在進行形で手を出してるや。

「と言うわけで、妖精さんに頼めばとんでもない過程を得てぶっただ結末を迎えるわけですが……どうでしょう？ 信じられません？

ならあなたももう一人の自分と言うものを試してみます？ 何ならわたしが頼んであげましょう」

「うん、妖精さんには気をつけないな！」

慌てて前言撤回しているくるみを見て、内心で上手く行ったと笑います。

妖精さんは扱い方が分かれば頼もしいものなのですが、現代の人にその有益性を教えるわけには行きません。わたしたちの祖先すら存在が知られていないらしい現代において、妖精さんの存在は世界を揺るがしかねないものです。わたしのせいで歴史が変わったりしたら目も当てられません。

……あれ？ 何か引つかかったような。

まあとにかく、妖精さんのことに関してはなるべく秘密にするので、秘密にするほど多くのことを知っているわけではありませんが、出来る限りは秘匿します……出来る限りは。

「……どうしたの？」

「いえ、なんでもありません。ただ、わたしの努力はどこまで報われるのでしょうかと」

「努力って、何の？」

「胃に穴が開かないようにする努力でしょうか」

「へー、先生も苦労するんだ」

「そりやあもう、苦労してばっかです」

どこからか“嘘吐け”と言うおじいさんの声が聞こえてきました。が、苦労を吹っかけてくる張本人が何をおっしゃいますか。わたしはただ、仕事のために妖精さんと遊んで、仕事のためにお菓子を作り、ついでにお茶会をしているだけです。決して遊んでなどいませんよ？

それから暫しの談笑の後、くるみとはそのまま別れて、わたしは夜風に当たるために屋上へ向かいます。屋上には菜園、太陽光発電、貯水槽などの施設が完備されているそうです。昔の建物がここまで便利だったなんて。またもや文明の違いを痛感。

「慣れてしまうと元の暮らしに戻れないかも……」

とは言え、いくら環境が良くて、定住するつもりは更々ありませんけど。わたしが帰るために、まずはやるべきことを見つけなければ。

屋上の手すりに身を寄せて、もうすっかり夜になった世界を眺めます。夜空はわたしたちの時代とあまり変わりませんが、校庭に蠢く感染者の皆様にしても目が行きます。大体の影が四人と同じ制服を着ているのを見るに、元々は彼らもこの学校の生徒だったのでしよう。悲しめば良いのか恐れれば良いのか、なんとも微妙な感覚。

そうやって暫く黄昏ていると、もぞもぞとポケットが動きます。おや？

「おたそがれー？」

「いつのまにポケットに……」

「いつのまにかー」

妖精さんが一人転がり込んでいたようです。この服の性能に常時1fが追加されました。

妖精さんはポケットから手すりに飛び移ると、そのまま眼下の風景を見ます。

「あらー」

そんな感嘆符一つきりで、妖精さんのリアクションは終了。助手さんの紙芝居でダウンするくせに、こう言うのは平気なんですね。まあわたしも感想はと改めて問われれば、感嘆符二つ分くらいしか返せないでしょうけれど。

それよりも、わたしは一つの可能性に行き当たりました。

「……ねえ妖精さん」

「はい」

「彼らを元に戻せますか?」

指差すのは変わり果てた人々。肉体がボロボロでは、たとえウィルスを取り除いたとしても、元の姿に戻ることはないでしょう。ウイルスのおかげで活動できているとしたら、それを取り除いたとしても最悪死んでしまうかもしれない。わたしたちの手には負えないものです。

妖精さんはじつと彼らを見て、わたしに向き直りました。

「なおせますか?」

「本当ですか?」

「ただしはりぼて」

「駄目じゃないですか」

まあ妖精さんもこんな事態は初めてですからね。殆ど死んでいるような人たち。肉体も精神も崩れ、魂も散らばっていると聞いた時から、嫌な予感はしてたんですよ。

「けんぜんなるたましいは、けんぜんなるにくたいと、けんぜんなるせいしんにやどるとか」

「誰の言葉ですかそれ」

「しにがみ?」

「わーお」

死神っていたんですね。死ぬときは痛みなく死にたいものです。それはさておき、妖精さんでもあの状態を治すのは難しいようです。ですがもう少し粘ってみると、妖精さんから結構良い反応が返ってきました。

「はりぼてじゃなく、うごかします?」

「動かすのではなく、自分で動くようにしてほしいんですが」

「……できるっちゃできる」

「おおっ」

さすが妖精さん。わたしたちに出来ないことを平然とやっつけてくれます。

「うごいてればいいんで?」

「……………」

希望が見えて舞い上がっていたわたしですが、続く妖精さんの言葉に我に戻ります。動いていけば? なんですかその動いてりやなんでもいいだろ的な言葉は。

「ごごごことか、わたしだれとかいいいます」

「記憶喪失ですね」

「ちかくのひとにおそいかかるかもです」

「発狂ですね」

「あと、たまにがくがくふるえます」

「禁断症状ですね」

「それでもいいですか?」

「いけないです」

問答無用でドクターストップ。止めときましょう。これ以上妖精さんに無理を言ったら、治った人々が逆に可哀想なことになりかねません。残念ですが治療は諦めることに。

「おやくだちできぬか?」

「服を作ってくれただけで十分感謝してますよ」

「そーか……………」

なんでしょんぼりするんですか。ああ、ポケットの中に潜ってしま

いました。倫理観に抵触するデリケートなことは、妖精さんも対応が難しいのかもせれませんね。仕方ない仕方ない。

ゆつくりとポケットを撫でながらも少しだけ夜風に当たっていると、屋上への扉が開きました。出てきたのはゆうりさん。シャワーを浴びた後のようですが、彼女も夜風に当たりに来たのでしょうか。

ゆうりさんはこちらに気付くと、意外そうな顔をしました。

「先生、いらしてたんですか」

「少々夜風に当たりに。あなたもですか？」

「いえ、その……」

ちらほらと周囲を見回すゆうりさん。ここにはわたし以外誰もいません。

「めぐみさんもおじいさんも、ここには居ませんよ」

「あ、そうですか……ありがとうございます」

ペこりと一礼して、ゆうりさんは菜園の奥へ向かいます。気になつて付いていくと、菜園のある一角だけ何も植えられておらず、代わりに白い十字架が置かれていました。

ゆうりさんはその十字架に向かって手を合わせ、黙祷を捧げています。それらの行動を見て、この十字架が何なのか、そして誰のものなのか察しました。

「これは、めぐみさんのお墓なんですね」

「はい……傍にいと分かつているのに、祈るのもおかしいと思いませんけれど」

そう言つて苦笑するゆうりさん。ここが彼女の墓と言うことならば、ここにはめぐみさんの体は無い。それでもお墓を作り、ずっと祈りを奉げられていたとは。それだけめぐみさんが慕われていた証拠でしょう。

「……おかしくはないと思いますよ」

「えっ？」

わたしがそう答えると、ゆうりさんはこちらを見つめ返してきます。

「めぐみさん呼び起こしたのは、ゆきさんの思いの強さ故です。け



れどゆきさんだけが原因となったわけではないでしょう。みきさんは当時居なかったそうですから、くるみにゆうりさん。あなたたちの思いだつて、ちゃんと届いています」

「……ふふ、ありがとうございます。そうだと良いですね」

「これは憶測ではなくて、めぐみさんからの証言です。わたしはそれを伝えただけですよ」

「めぐねえが?」

「はい」

まあ、めぐみさんが自身のことをそこまで分かっているのかはともかくとして。

「そうですか……そうだったんですね」

嬉しそうに微笑んだゆうりさん。喜んでいただけは何よりですが、居なくなつた者の声を伝えるのつて、なんだか宗教みたいですね。必要な時以外は自重した方が良くもかもしれません。依存されて仕事を増やされるのも困りますし。

とまあそんな身も蓋もないことをつらつら考えていると。

「……ねえ先生。先生はやっぱり、元の時代に帰りたいんですか?」

ゆうりさんがとつても答え辛い問いを投げかけてくれました。今頃になつて蒸し返しますかね普通。

その言葉は僅かに緊張を含んでいて、その表情は微かに願うようでした。

まあ、現状を受け止め、対応でき、妖精さんやめぐみさんと交流の出来る大人と言うのは、今の現状では得がたい存在なのでしょう。切羽詰った状況ならわたしだつて共に行動してくれることを望みます。そんな心情を加味すれば、ゆうりさんの揺らぐ瞳も理解できないことはありません。

ですが。

「そうですね。帰りたいです」

前も今も、これは変わらない思いです。ここで言葉を濁すのは、わたしにも相手にも何の得もありません。だからこそ、わたしはゆうりさんたちの思いを突き放します。

「わたしの故郷は、簡単に捨て去れるほど軽いものではありませんから」

「そう、ですよ。すいません。おかしなことを言っただけ」

わたしの無情な答えを聞いたゆうりさんは、やはり思った通りの表情をしていました。空気を読んで欲しいところを至極真つ当な意見で崩された時の局長のような顔です。違うところと言えば、局長ならなんとも思わないのに、ゆうりさん相手だと途端に言い難い感情が芽生えることでしょうか。

これからの関係を円滑に保つためにも、フォローは必要そうですね。

「まあ何です。帰るのは確かですが、方法が見つかってすぐ帰るとも言っていないません」

「え……？」

「せっかく現代に来たのですし、現地調査でもします。しばらくはここに滞在することになるでしょう。その間は原住民に協力、と言う形になるでしょうね」

「……ふふ、そうですね」

打って変わって笑顔を見せるゆうりさん。意図が伝わったようで何よりです。

「頼りにしますよ。先生」

「……あくまで協力です。無償で働くわけではありませんよ」

「それでもです。先生が来てくれて、本当に良かった」

そう言っただけで朗らかに笑うゆうりさんは、本当に安心したようでした。

……なんだかこれ以上は踏み込んではいけないような気が。思った以上に精神的に参っているようです。これ以上近づきすぎると、彼女達の心の中でわたしと言う存在のカーブが上がり、べたべた甘えてくるわ帰るときは大事になるわと、わたしに不都合な未来が起これると予想出来ます。

生徒と先生。この関係性そのまま、この距離感を保つように頑張ってみましょう。もう手遅れかもしれないませんが、まあその時はその時です。我が身を削って事態を収めるのは得意中の得意ですから。しく

しく。

「風も冷たくなってきましたし、そろそろ戻りましょうか」

「はい。先生」

……でもまあ、慕ってくれるのは悪い気がしませんし。別に良いかな、なんて。

そんな思いは、来るべき別れの時の状況を想像して一瞬で吹き飛びましたがね。

(・ワ・)

ゆうりさんと共に部室へ戻ると、みきさんが中でそわそわとしていました。

「あ、先生。悠里先輩も」

「どうしたの?」

「先生の寝具はどうしたら良いのかわかって……」

死活問題でした。廊下に立ってなさいならぬ、廊下に立って寝なさいとか?

「身内でも遠慮なく言うぞ。寒い」

うるさいです。あといきなり入って来ないでください。思考も読まないでください。

わたしの後ろからすつと滑り込んできたのはおじいさん。さつきまでめぐみさんとの時代の知識について語っていたはずですが、どうせめぐみさんは重火器についての質問を出され、おろおろと戸惑っていたことでしょう。

そう言えばめぐみさんは?

「彼女ならゆきと言う子を迎えにシャワー室へ行っただぞ」

だから思考を読むなど言うのに。

そんな一方的なやり取りは露知らず、二人の会話は進んでいました。

「予備の寝具があった筈だけれど」

「サイズが合いませんよあれ」

「えーっと、二つ繋げれば」

「いやいや。そこまでしなくても良いです。体を丸めて寝ますよ」

「……すいません」

そんな程度のことなら問題ありません。寝具があるだけましです。席に座ると、みきさんが暖かいコーヒーを出してくれました。気が利きますね。普段はあまり飲みませんけれど、たまには良いものです。

ちなみに、わたしのコーヒーを入れているマグカップは、ゆきさんがわたし用にと似顔絵付きで名前を書いてくれています。あの子も何かとわたしを逃がさないための包囲網を築いているような。無意識でしょうか。

「くるみとゆきちゃんは？」

「ゆき先輩ならシャワーです。多分もう帰ってきますよ。くるみ先輩は」

「ただいまー」

「……今、帰って来ましたね」

噂をすれば何とやら。くすくすと笑い合うわたしたちに、くるみはキョトンとしています。

「何だ何だ？」

「いえ、なんでもありませんよ……ふふふ」

「むー、なんか疎外感を感じるなー」

「別にそんなつもりじゃないのよ。ただ、ちよつとね」

「ま、ならいいや。リーさん、私にも飲み物頂戴」

「はいはい」

くるみも席に座ってカップを持ちます。甘い匂いがするので多分ココアでしょう。

そしてそれから間もなく。

「ただいまー！」

「おう。お帰りー」

「ただいま戻りました」

「お帰りなさい。めぐみさん」

賑やかな子が保護者を連れて帰ってきましたよ。めぐみさんの名前を出すことで、それとなく全員にめぐみさんの存在を気付かせます。

「リーさん、私にもココアちよーだい！」

「はいはい。分かったから席に座って」

「うん！」

「今日はいつになくハイテンションだな」

「そうだよ！ だって新しい先生が来たんだもん！」

「課題も三倍だぞー」

「そ、それは……むむむう」

「先輩はもう少し勉強するべきですから、丁度良いですよ」

「みーくんまでそんなく」

暫くうーうーと唸っていたゆきさんですが、こちらを見る時にはとつても嬉しそうな笑顔が浮かんでいました。あれ、この子もうわたしを離さないつもり？ 距離間ゼロですか？

「でも、先生が来たくれたのはとつても嬉しいんだよ？ 本当だよ？」

「ええ。分かっていますよ」

「……ああ。分かっているよ」

おじいさんは本当にゆきさんに弱い様子。これは良いことを知りました。今度からゆきさんにおじいさんへ意見を言ってもらいましょう。頼りにしてますよ。ゆきさん。

そうとは知らない当人は、にこにここと笑顔で妖精さんを握っています。……あ、そう言えばあの子ポケットにいた。いつの間にそこへ。

「勿論妖精さんにも会えて嬉しいよー」

「ぼくらでいどがほめられるなんて〜」

相変わらず人間相手には低姿勢ですね。

「でもま、賑やかなのが増えて困るくらいだけだな」

「そこは大丈夫！ 私が賑やかにはさせないよ！」

「一番賑やかな先輩が何を言ってるんですか」

「えー、私そんな賑やかじゃないよう」

「あら、いつも私たちを振り回しているのは誰かしら？」

「まあ、そこが良いんだけどな」

「褒められてるのか馬鹿にされてるのか分からない！」

「褒められているんですよ。多分」

「多分ってなに!？」

あーだこーだと姦しく騒ぐ生徒四人に、いつの間にか妖精さんも増えていきます。全く。あとで收拾をつけるのが大変そうですね。ですが、そんなに悪い気がしないのは、見ている分には心を和ませるものだからでしょうか。

何の悪意も裏もない、純粋に好意だけで接することができる相手。わたしには殆どおりませんし、誰も彼も癖が強くてあのような会話は出来ません。だから、彼女らの遠慮のない言動は少し新鮮で、とても微笑ましいと思います。羨ましいとは思いませんけど。

「……時々、自分が幽霊だと忘れることがあります」

ふと、めぐみさんがわたしにだけ聞こえるよう呟きました。

「彼女達の会話があまりに平凡なものだったから、つい私も一教師として輪に混ざろうとして。そしてすぐに、自分はもう居ないんだって気付くことがあります」

「……恐らく、彼女の想いが君の中に混ざっているが故に、彼女の望む通りの、日常に生きる教師としての言動をすることがあるのだろう」

「……それもあるかも知れませんが」

「うん?」

わたしも、彼女達に気付かれないように呟きました。

きつと彼女達にとっては、これこそが日常なのでしょう。外部では感染者に怯え、内部では物資の消費に怯え、助けが来るかどうかも分からず、いつ自分が死ぬか、さもなければ感染するかも分からない。

それでも、わたしは今ここにいて、そんな鬼気迫るような圧迫感を感じません。彼女達は必要な時は必死になりますが、日々の中では変わらない日常を過ごしています。朝起きて、ちゃんとご飯を食べ、一日の仕事をしながら、その終わりに眠りにつく。そんな毎日を送ってきた筈です。感染者と言う危険はあれど、日々を生きていくことに変わりはありません。命を守る必要はあれど、日々の安息を疎かにして

はいけません。

だから彼女達は日常を描く。昔と変わらぬ日常を。

「めぐみさんが惹かれるのは、日常がちゃんと回っている証明ですよ」「それでしようか?」

「ええ。それくらい日々が充実していると言うことですよ」

「……そうですね」

「そうですよ」

お先真つ暗でも日々を生きていかなければならないのは、わたしたちも同じですからね。

衰退してもパンデミックでも、生きている限り日常はやってきます。それを如何に充実して過ごせるか。それが一番大切なのではないでしょうか。

少なくともわたしは、ちよつとの刺激だけの、のんびりした日常が良いと思いますよ。

「さあ、そろそろ眠る時間よ」

「そうだな。今日は疲れたから……ふあ」

「よく眠れるでしょうね……ゆき先輩。ここで眠らないでくださいよ?」

「うゆ……分かってるよお……」

もうすぐ、その日常の中の一日が終わります。この一日は、わたしにとっても彼女達にとっても、とても充実したものであったと思います。だから願わくば……明日は何事もない、平凡な毎日であってほしいものですね。

人類は本日も、絶賛生活中。

「妖精さんの、いつもどおり」

しかしわたしの願いは叶わず、明日は過酷で壮絶な一日となるのでした。

「ふう……」

まだ明日は来てませんけれど。でもそんな予感がしてなりません。色々と考えることもありますし、普段わたしが就寝するには早い時間帯なので、わたしはこっそり床から起きて学校内をふらふらと歩いていました。

周りにはおじいさんもめぐみさんもおらず、わたし一人だけが取り残された気分。昔は一人ぼっちが嫌なくせに孤独で良いと意地を張ってましたけれど、今は素直にほっとします。わたしの数少ない成長したところの一つでしょうか。

「いいつきよですな」

……まあ、この方達の存在も原因にあるんでしょうけれど。

「こんばんは、妖精さん」

「こんばんわー」

傍にいてだけで安心と信頼と期待と不安と恐怖と諦観とを分け隔てなく与えてくれる妖精さん。考えるものの一つとして、もちろん妖精さんのことがあります。

今回は異例の事件……おほん。

今回は異例の事象なので、特に妖精さんの存在がポイントになります。基本的にわたしではどうにもならない事態なので、終始妖精さんに頼ることになるでしょう。ですがここは人様のテリトリーなので、すから、羽目を外してお菓子の子の出来上がりくなんてのは許されないことです。妖精さんに対してはします、させます、させませんの心構えで挑む所存。

「今はお一人だけなんですな」

「いっぴきおおかみつてはんじゆくたまご?」

「ハードボイルドの間違いでしょうか?」

「うまくはしやげないはんぱものー」



「はしやがないで下さい」

しかしおかしいですね。妖精さんは大体こんな素敵な夜にはこそ働いてそうなんです。周囲に彼らの気配はなく、本当に一人であるように思えます。

「大人しい。逆に怪しいですね」

「ぼくたちうたがわれてる」

「どうして一人なんです？ 大体一人見たら百人はいるはずなのにすが」

比喩ではありません。本来、妖精さんが目の前で十人増えれば、その水面下で数百人程度は動いています。見えている範囲を抑えても、動き出した妖精さんは止められません。なのに今は不活性状態。

暴れられるのも困りますが、大人しすぎても困るのです。その原因は？

「あるといえればぐとかもろもろありますが、あらぬといえればえむびーがありませんで」

「バグ？ いやそれよりも、エムピーですって？」

「まじつくばいんと？ まじつくばわー？」

それってゲームとかに出てきたあれですよ。確か魔法とかを使うパワー的な何かだったはず。でもそんなものが空气中に漂ってるわけありませんし、わたしの時代にもないはず？

……魔法の力？ それって“わたしたち”が投げ捨てたものですよ？

「そう言えば、わたしって種としては絶滅危惧種に相当するのでは？」

「きちよーなさんぷる、ほるまりんづけー」

「きつとあなた達の方が貴重なサンプルだと思いますよ」

「ひえー」

そう、“わたしたち”の種はこの時代の人類とは違うわけです。妖精さんは“わたしたち”の産物。わたしがここに来たから妖精さんも来たわけで。

ってことはつまり、わたしが元の時代へ帰ったあと、この時代には妖精さんが存在しなくなると言うこと？ じゃあ妖精さんの力が

乱用されて歴史改変なんてこともなくなる？ となればわたしの心配事も無くなります？

……かちげーでは？

「にんげんさん？」

「……ねえ妖精さん。楽しいこと、しません？」

きらりと、妖精さんの目が光ります。

「そのはなし、いちまいかんでも？」

「もちろん」

むしろ何枚でも噛んでください。妖精さんの力さえれば怖いものなしです。ここを生活するにあたって、普段と変わらぬ文化的生活レベルを獲得すれば、わたしも生徒四人もハッピーです。なんて素晴らしいアイデア。やはりわたしは天才か。

「まずは物資の供給です。食べ物飲み物作っちゃってください。報酬はドーナツ一山」

「おおー！」「これは！」「ゆうりようぶっけん！」

「次にライフライン。水道ガス電気その他諸々整備してください。報酬はキーキーホール」

「ひゃー！」「なんとー！」「ほわいとなしよくばー！」「おどろきのしろさー！」

「そして警備。外の感染者が入れないような要塞にしてください。報酬はビスケット山盛り」

「きゃー！」「わあー！」「すてきー！」「ふとっばらー！」「いっしょうついでくー！」

「おまけに何もかんも素敵仕様にして、明日は優雅な紅茶タイムにしましょう！」

「ふあー！」「うひゃー！」「かった！」「ごぼれそうなおかしのやまー！」「ここがてんごくです？」「にんげんさまはかみさまー！」「おこえかったー！」「ひとはたひとはたー！」

これだけ発破をかければ良いでしょう。やりすぎかも知れませんが、こんな世界にはやりすぎが丁度いいくらいです。

「はたらかざるものくうべからず」「おこぼれにあずかるです？」「おこ

ぼれをかじっていきたく」「かじるためにはたらくー」「ほんまつてんとうでは?」「しごととおかし、どっちのため?」「しごとをするとおかしがもらえます」「なんというほわいとなしよくば!」「それてんどん」「ありや」「こんなにぜいたくでいいのかしらん?」

よしよし。順調に増殖していつてますね。やっぱり妖精さんは頼りになります。ことこんな暗い所では妖精さんが最終手段かつご都合手段ですから、どんどん増やしてどんどん使ってどんどん楽しくして行きましょう!

「やめんか馬鹿者」

「うわーっ!」「ひゃーっ!」「びーっ!」「にゃーっ!」「みゃーっ!」「ぎゃー!」

ちなみに最後の悲鳴はわたしのものです。目の前におじいさんの幽霊が。ひえっ。

おじいさんは現れると同時に強く手を打ち、妖精さんたちを全て丸めてしまいました。ああ、なんてことを。これでは妖精さんが動けないじゃないですか。

「ああ、夢のマイカントリーが」

「なにが自分の国だ。お前は帰りたいのだろう。むやみやたらに充実させてどうする」

「そりやあ帰るまでの拠点にするんですよ」

「お前は墮落するからな。下手に満足させるといけない」

わたしが墮落するのは確定なようです。墮落して何が悪いんですか。いや悪いけれど。

「とにかく、そう安易に妖精さんに頼るな」

「そんなあんまりな」

「世界に満足したら帰る方法が見つからなくなるのでな。ありがたく受け取って考えなさい」

「むう」

小さな親切大きなお世話。そもそも親切で助言してくれているとも思えません。

けれどそこまで言われては仕方ありません。もう少しゆっくり考

えてみることにしましょう。幸い、ここでの暮らしはそこまで不便ではありませんからね。

「……不便じゃないと思っっているから、まだ分からないのだろうが」  
なんかおじいさんが勝手に心を読んで呟いた気がします。わたしはおじいさんからの新たな情報を頼りに思考考察案を開始して、それを聞き取ることが出来ませんでした。

とりあえず今は眠たくありませんから、徹夜する勢いで考えを巡らせてみましょう。人は考える葦らしいですから、わたしたちもそれに倣わねば。

……………。

「先生。朝ですよ」

「朝」

朝とな？ ついさつき情報分析を行っていたはずなのに。と思つて外を見れば明るい。この時代の月は明るいんですね！。

目に焼きつく光線！ 灼熱の熱線！ 肌に痛い紫外線！ まるで太陽みたい！  
太陽でした。

太陽でした。

「寝落ちとは不覚……」

「ほら、朝ごはんできてますよ」

それは楽しみです。昨晚のごはんはとても美味しかったですから、きっと今朝のごはんも美味しいのでしょう。これから始まる至福の時を思い、ひとまず思考を放棄して、わたしは起こしてくれたみきさんの後ろをついていきました。

(・ワ・)

もっさもっさ。もっさもっさ。

「乾パン美味しいですねー」

「つつても、毎日食べてるからそこまで新鮮味はないけどな」

「そうなんですかー」

「乾パンや缶詰はまだ余裕がありますからね」

だから毎朝乾パンなんですね。あははうふふ。ふう。

これは食事とは言いません。おやつです。それも適当に摘まむ感じのおつまみです。昨日の食べ物には保存性に優れていたから食べることでできたもの。普段はこうして乾パンや缶詰と言った保存食が主食だそうです。

正直、避難生活と言うものを舐めていました。今までは配給や支援の物資が運ばれてきていたため、クスノキの里では飢えと言うものがほぼありませんでした。遺跡調査の時にひもじさは経験しましたが、それも今は昔。物が足りないとはこう言うこと。物質文明の哀れな末路とはよく言ったものです。

しかしながら、子供が文句も言わずに食べているのに、わたしが駄々を捏ねるわけにもいきません。肉なし具なし食料なしはもうすでに通った道。これくらいは耐えられる範疇です。むしろ三食寝床付きなんてかなり良い職場なのでは……なんて考え出したら立派な社会の歯車です。文献では社畜とも言いますね。わたしの職場って真っ黒。

「リーさんお水ちよーだい」

「あ、私もー」

「はいはい。先生はどうします?」

「ではお願いします」

しかしながら、これが普通と言うのも考え物です。やはり妖精さんに……おじいさんが駄目って言うんですけど。なんで駄目なんでしょう? 食料問題を解決するだけでも、現状のどうしようもなさは薄れると思うのですが。

「ごちそうさま」

とにもかくにも、わたしたちは朝食と言う軽食を終え、日々の身の振り方をなぞります。ゆきさんは授業。くるみ、ゆうりさん、みきさんの三人は後から各設備の点検及び手入れ。わたしは先生なので、ゆきさんと三人の間を行ったり来たりします。

「じゃあ、いつてくるねー!」

「いつてらー」

「いつてらっしゃい」

「気をつけて下さいよ」

「また後でね」

「うむ」

ゆきさんは騒がしく部屋を出て行きました。それを見送った五人は……って、めぐみさんとおじいさん。いつの間に。幽霊らしく消えたり現れたり自由自在ですね。

「さあわたしも行動を開始しましょう。ところで何をすればいいの？」

「わたしは具体的にどうすればいいのでしょうか？」

「私達のお手伝いと、ゆきちゃんのお授業をお願いします」

「授業のタイミミングは私が指示しますが、教える内容はそちらにお任せします」

ふむ。授業はそこまで頻繁にはないでしょうから、基本的には手伝いがメインになりそうですね。でもちよつとまって。わたしはお手伝いできますが、おじいさんは実体が無いので出来ませんよね。これっておじいさんだけ暇人になるのでは？

その辺りをおじいさんに訊ねてみたところ。

「そうなるな」

と真顔で返されました。え？

「私は本来居ない者だ。未来ある者の邪魔をするわけにはいかんだろう」

あれえ？ 昨晚わたしの邪魔をしてみましたよねえ？

「そもそも見えなければ何も出来ない。実に残念だが仕方が無い」

「あ、おじいさんは丈檜さんの授業の方に専念して頂けるとありがたいです」

「……何時間も同じ授業をするのは如何なものかと思うのだが」

「その辺は丈檜さんが融通を利かせてくれますので大丈夫ですよ」

「……そうか」

めぐみさんの言葉に、おじいさんはすぐに沈黙しました。

ねえめぐみさん。調停官と言う職業に興味はありませんか？ 今

なら無茶苦茶を言う老人を止めるだけで三食昼寝付きですよ。是非。

それにしても、ゆきさんはやはり何処かで現実を認識しているようですね。めぐみさんを介さずとも、学校の時間でもないのに空気を察して部屋を出たり、同じ授業が続くことに疑問を持たなかったり。その辺の矛盾を突けば簡単にボロが出るでしょうが、そこを敢えて訊ねるような空気の読めない人はここにはいません。

……一番安定しているのはゆきさんかも。あとで菓子折りもってお近づきになつとこ。なにせ爆発しない癒し成分は貴重なものですからね。

さて。今日も元気に明るく見せて、一日頑張ってみましょうか。

(・ワ・)

「上の方、固定しましたよ」

「おーありがと、やっぱり背が高いっていいなー」

最初のお手伝いはバリケードの補強です。机や椅子を組み合わせて、ちよつとやそつとじゃ崩れないように固定。縛るのに使うのは有刺鉄線なので、時々チクチクと刺さって痛いです。

なお、バリケードの補強は主にわたしが担当して、その間くるみは周囲の見回りだとか。普通は役割逆じゃないですか？

「お申し付けの通り、上の一箇所は通れるように空けときましたよ」

「おう、ご苦労様」

「でもなんで上の方を空けておくのです？」

「主に私が向こうへ行くために。一回渡る度にバリケードを崩すのは危ないからな」

ちなみに、空けた部分はわたしが手を伸ばして漸く届く所にあります。わたしが上つて向こう側へ渡るには時間が掛かりますが、くるみはひよいひよいと机を踏み台にして渡れるようです。体力と運動神経には自身が有るのだとか。やっぱり役割逆じゃないですかね？

「……と言いますか、なんであなたが通れるようにしたの？」

「ん？ そりゃ、向こう側に用事がある時に必要だからな。いる物を

取ってきたり、それと」

くるみの言葉を遮るように、呻き声が聞こえました。

「……こんな時とかに通るんだよ」

「……おやまあ」

ここにも出てくるんですね。「彼ら」。

数は1。数え方は人？ 体？ 匹？ まあなんでもいいですが。ふらふらと覚束無い足取りで、こつちに視線を向けてきます。目と目が合ったので軽く会釈。するとその歩みはこちらへ向いてしまいました。や、別に挨拶のためにこつちに来なくてもいいですよ。

しっかし何回見ても酷い身体だなーと思っていると、くるみがシャベルを背負ってバリケードを上っているではありませんか。あのシャベル結構重かったはずなんですが。

「先生は見ててくれよな」

「言われずとも」

「うーん、教師としてその返答はどうなんだろ」

ぶつくさいいながらも慣れた様子でバリケードの上へ。流れるようなその作業は日常茶飯事であることの裏返し。ならばわたしが止めるようなことじゃありません。

くるみはそのままポケットからピンポン玉なるボールを取り出し、緩く投げます。しかし軽い玉は簡単に“彼”を越え、接地と同時に廊下に音を響かせました。“彼”はその音に気を取られ、目を逸らし、玉を見て、足を動かし……

「お休みなさい」

くるみが着地して、シャベルを振るうには十分な時間でした。

その切っ先は空気を切るように鋭く、面で叩くと言う慈悲もなく、狙いは変わらず首へ。緩慢な動きしか出来ない“彼”に避けられるはずもなく、シャベルは吸い込まれるように首を……

ここから先は見ません。わざわざ不快になることも無いでしょう。一仕事終えたくるみさんは、そのまま“彼”を近くの教室へ運んでいきました。いずれ焼却とかするんでしょうか。そのお手伝いは嫌だなあ。



「よつと、ただいま」

「あ、お帰りなさい」

戻ってきたくるみの体に血の跡はありません。返り血が凄かった気がしましたが、それを浴びないように上手く立ち回っていたのでしよう。ただ、仕事に使った獲物はそう言うわけにもいかず、持っているシャルベルは赤黒い色に染まっています。

くるみはわたしと目が合うと、ぽりぽりと頬を掻き、ちよつと目を逸らしました。

「あー、ちよつと引いた？」

「ちよつとどころじゃなく、かなり引きました」

「だよなー……」

たははと笑うくるみの笑顔は、けれどどこか陰のあるものでした。原因はわたしの心無い言葉のせい？ 仕方ないじゃないですか。引いたのは事実ですし。

「さすがにシャルベル振り回して叩き潰すのはちよつとキツイです」

「そう、だよね……」

「わたしも生身の人間相手にショットガンを放ったくらいしか経験がありません」

「……いやいや待て!? どんな状況!? そっちの方が引くよなー!」

「あの時は我を忘れていましたから。若気の至りと言う奴です」

「どんだけ世紀末な子供時代を送ってたんだ!」

「失礼なことを言われたので、ついカツとなって」

「動機が結構くだらねえ!」

「あ、でも大丈夫です。ちゃんと相手に当たらないように狙って撃ちましたから」

「それショットガンだよなー!」

鬱から一気に躁へ。ゆきさんに負けず劣らず煩い子ですねえ。

一気に叫んだくるみは、深呼吸をしたあとでため息を吐きました。その呼吸って二度手間では？

「……ありがとう」

「なんのことです?」

「先生の冗談のおかげで、少しは気が楽になったからさ」

冗談ではないのですが。まあ訂正しなくても良いでしょう。

「教師は生徒の心理的負担を軽減する義務があるそうです」

「そこは当然の事をしたままでですって言って欲しかったな」

「そんな誤解を招くようなことは言いません。それにあなたは十分強いでしょうに」

「……あたしが強い、か。ならいいや」

ああ、これは覚悟を決めた人の顔です。苦情不可避の仕事を強制された時のわたしの表情に近い。さっきの言葉は訂正。これは強いように見せてるだけです。

考えてみれば、わずか一年足らずで同じ学校の生徒を処理できると言うのは異常なことでした。例えば意思疎通が出来ずとも、人の姿をしているってだけで、傷を負わせる時の心理的負担と言うのは計り知れない。そんな行動を慣れるまで続けているくるみは、もうとつくに越えてはいけな線踏み越えたのでしょね。

その最後の線は、一体何だったのか。それは恐らく“彼ら”を処理することを厭わなくなるような出来事。この中で戦闘が可能なのはくるみだけ。くるみだけが味わった経験……家族か友人でも死んだのでしょか。

止めとこ。これ以上は聞かなければ分かりません。考えても暗くなるばかりです。

「さ、次の場所に向かおうぜ」

「そうですね。でもそのシャベルはどうするんです?」

「仕事が終わったら洗い流してくるよ」

血は洗い流せても、シャベルの重みは洗い流せない。とか考えてそんな表情です。

あのシャベルも本来は土を掘るための道具。そしてこの少女も本来は生意気に遊び呆けている年齢。でもそんな常識は周囲の全てが歪めてしまう。嫌ですね。そこは気付かれずにゆつくりと歪めるべきでしょうに。

結論。くるみがシャベルを振り回すのも、わたしがちよつと腹黒い

のも、全て世界が悪い。

(・ワ・)

無事に補強作業が終わり、くるみのシャベルを洗い流したところで別れて、そのまま屋上へ行きます。屋上ではゆうりさんが菜園を管理しているそうなので、それはそれでお手伝いが必要とか。先ほどまでの力仕事よりは楽でいいのですが。

「あ、先生。バリケードの方は大丈夫でしたか？」

「素人目で見ると大丈夫だと思いますよ」

「そうですか……あれ、くるみは？」

「くるみなら水洗場で別れてそのままです。部室とかじゃないですかね？」

「水洗場……あの子、また一人で行動したのね……」

憂鬱そうにため息を溢し、こちらに非難の目を向けてくるゆうりさん……あれっ、なんでわたしにそんな目を向けるんです？

「先生が傍にいたなら、止めてくれても良かったのに」

「そりゃあ無茶ですよ。わたしはあれが普通のことだと思ってたのですから」

「まさか、そんな危険なことが普通なわけありません」

「今の状況では普通でしょう。あなたたちは、もう異常のラインを踏み越えてしまっている」

「そんなことありません！ 私たちは……！」

その先の言葉を、ゆうりさんは口にしませんでした。きっとその先の言葉は、今のこの環境ではあまりにふざけた物言いだと気付いたからでしょう。

わたしたちは、普通の少女だ——言おうとした言葉はこんなところでしょうかね。けれど今は普通ではいけない。この先生が残るには、皆さんが言った通り、日常では触れられない様々なことを経験する必要があります。そしてこの環境にいち早く適応した例が、くるみであり、ゆきさんであり。そしてみきさんとゆうりさんも少しずつ慣

れていくのでしょうか。

さつきは半分冗談でしたが、世界が悪いと言うのは結構核心を突いたのかも。

「状況的には普通のことでも、感情的には異常ですか」

「……私たちはまだ、普通でいたい。日常が終わったんだと認めたくない」

「普通の少女が生きていくには、この世界は厳しいですよ」

「それでも、こんな理不尽な出来事に、私たちの全てが壊されるのは嫌なんです」

毅然に振舞うゆうりさんを、強いと言うべきか脆いと言うべきか迷います。この子はまだ現状を受け入れていない。受け止めたままどうするべきか分からないでいる様子。

ゆうりさんはきつと、こんな事態にした世界全てを恨んでいるのでしょうかね。

「すみませんね。少し言い過ぎました」

「……いえ。大丈夫です。菜園の水撒きをお願いしますか？」

「分かりました」

ホースを持って菜園の植物に水をやります。さらさらと水を撒いていると次第に無心になれます。おまけに太陽の陽気とそよ風が当たって心地いいです。寝はしません。寝はしませんが、けれども、こう、うとうととする事はあるわけですよ。学生を経験した人なら分かるはずです。分かりますよね？

おっと目の前にトマトが。

「先生？」

「……危うく畑に突っ込むところでした」

「眠たそうにしていますけど、やっぱり布団が小さすぎて眠れませんでしたか？」

「いえいえ、昨日はちよつと夜遅くまで学校を徘徊してましたから」

「——先生？」

むむつ、底知れぬ威圧感が。これはおじいさんの逆鱗に触れた時のような感覚です。今のうちに言い訳と弁論と屁理屈を用意しておく

なければ。

と思つて顔を上げたら、にこやかな笑顔のゆうりさんがいました。

「夜更かし、とは?」

「いやこれはそのあの、まあ眠れなかつたものでして」

「先生は生徒の手下です。夜更かしや徘徊は止めて下さい」

「でもいつもは起きてる時間でして」

「だめです」

「少しだけですよ。少しだけ」

「だめ」

「はい」

Y曰く、強者の笑みは本来恐ろしいもののだそうです。確かに妖精さんを見ていると、強い者は笑顔で恐ろしいことをすると理解できますね。つまり、絶えず笑顔でいるゆきさんとゆうりさんが、学園生活部の中で一番強いのです。

笑顔の使い方は互いに正反対ですが。

「今度から気をつけてくださいよ?」

「分かりましたよ……」

先生なのに立場が低い……等と思いながら、わたしとゆうりさんはせつせと菜園の手入れをしていきました。これはこれで結構体力を使いますね。特にわたしは背が高いので腰を曲げる必要があります、すごく腰が痛いです。

思えば調停官を目指したのは重労働を避けるためだったはず。しかし現状はどうでしょう。

「何故こんなことに……」

「……随分、辛そうですね」

若干前かがみになっているわたしを見て、ゆうりさんが苦笑しています。ゆうりさんの背丈なら立っていても作業が出来ます。わたしの背も標準くらいで良かったのに。

「それにしても、先生は一体何処の人なんでしょう?」

「何処の人とは?」

「珍しい服装で背も私達より高いのに、同じ日本語を話していますか

ら、日本の人なのか外国の人なのか分からなくって。最初に会った時も英語が必要かと考えていたんですよ」

「あー、未来では人種間の垣根やら文化の違いやらは無いんです」

そんなものに拘っていられるほど余裕はありませんでしたから。

「未来では、そんなにも衰退が進んでいるんですね」

「まあ未来がないと言う状況はここと同じですね」

「……………」

ゆうりさんは沈痛な表情で手を止めてしまいました。ちよつとしたジョークのつもりだったのですが、思いのほか大ダメージだったようです。

「まあ、あなたたちでも生き延びられたのですから、他にも退避している人はいるでしょう」

「そうでしょうか？」

「ええ。その人々と合流できれば、現状の打開策も出てくるかもしれませんが、

「そう、ですね」

しかし未来がないのは事実。状況を鑑みるに、わたしたちの時代より早く滅びる可能性が高いです。緩やかな衰退は諦観の念を抱くに十分ですが、突然の滅亡はそりや恐怖も絶望もしますよねえ。

……………ん？

「……………あれ？」

この状況って、おかしくないですか？

「……………先生？ どうかしましたか？」

「……………ちよつと考え事です」

これは後でゆつくりと考えましょう。もしこの考えが正しいなら、何が間違っているのかも分かります。けれどそれはあんまりにも突拍子も無いこと。

もしかして、この世界は間違っている……………？

(・ワ・)

ゆうりさんの手伝いも終えて、わたしが教室に戻ってみると、そこにはみきさんとゆきさん、そしてめぐみさんとおじいさんがいました。ゆきさんの周りで小さな人影がうようよいるのには目を逸らします。好かれすぎじゃありません……？

「あ、先生。お帰りなさい」

「お帰りなさいーい！ ……じゃあ、きりぎりす！」

「ただいま戻りました。今は休憩ですか」

時刻はもうお昼近く。ゆきさんにとっては昼食を取るための休憩なのでしよう。

授業はどうだったのかとおじいさんを見てみると、何やら神妙な顔でこちらを見ってきます。

「ああ、お前が少しは利口者で良かったよ」

「……なんですかおじいさん。今になって孫の有用性を認識するなんて」

「ものを教えることがこんなに大変だとは思わなかった」

「あ、あはは……」

隣でめぐみさんが苦笑いしています。どうやらゆきさんの頭は大変よろしくないようですね。幻覚とは違う意味で。

「ところで先生。妖精さんが結構増えてますけど、大丈夫なんですか？」

「大丈夫ですよ」

「……本当ですか？」

「大丈夫です」

そう、大丈夫。何が起こつても命の危険はありませんから。ちよつとばかり気が遠くなることや寿命が縮む事が起きるかもしれませんが大丈夫です。

そして先ほどから何やら呟いているゆきさんは、妖精さんとしりとりをしている様子。

「砂かー。むむう……ナスー！」

「なすとな」「おたんこなす」「またえらいものを」「ほくらのこと？」「ぼりぞうごんはにんげんさんのとっけんゆえー」「でもそこがすきー」

「すきとな」「ではすきで」「すきー」

「すきっ…き、き…き、きらー!」

「なんとー!」「ぼくたち、いらないこ」「ひつようなし」「きらわれも  
の」「むしのようにちっほけな」「でもそのむしにまけてます?」「むし  
いかかー……」「いかー……」「じゃ、いか」

「えーと、えーと……貝!」

「かい?」「かいとは」「かいこうかんのこと」「ぼくたちでんな」「あ  
うー」「はらきってわびる?」「はらきり! はらきり!」「たまとつた  
どー!」「おいのちちようだーい!」「おいのちとつたどー!」「おいの  
ちー!」「いのちだー!」

「命、ち、ち……」

随分と根暗なしりとりですね。

「部屋に戻ってからずっと妖精さんと遊んでいます」

「妖精さんを纏めてしまうとは、ゆきさんってすごいですね」

「そんなに妖精さんを御するのは大変なんですか?」

「大変なものも、そもそも御せるものではありません。一つのきつか  
けを起点として爆発的に増えて、異常な速度で文明を築き上げ、そし  
てまた小さな出来事によってあっけなく散っていく。その方向性を  
ちよつと変えることはできても、走り出した彼らを止めることはでき  
ませんよ」

まあ、わたしは少々妖精さんと”話せます”から、ある程度抑制は  
出来ますけれど。それでも彼らの騒動が絶えることはありませんし、  
これからもその兆しはないでしょうね。

「一つのきっかけで、増えて文明を発展させる……まるで人類みたい  
ですね」

ほつりとみきさんが零した言葉。けれどそれは当たり前なのです  
よ。

元々は妖精さんもわたしたちと同じだったのですから、人類の真似  
事のようになるのは当然のこと。もとより妖精さんの集合離散の法  
則は、一つの目的を達するために集まり、それが叶えられたら簡単に  
離れる、人類史の縮図のようなものですから。



「新人類と言われるのも納得ですね」

「……先生は、そのきつかけを作る事が出来るんですよ？」

何かを問いかけてくるようなみきさんの目。これはきつと、Yの悪巧みに気付いた時のわたしの表情と同じなんでしょう。

「どうやらまずいところに気付かれました。しまったようですね。」

「まあ、作れるかと言われれば否とは言えませんね」

「じゃあ、食べ物や水を生み出すことも出来るんじゃないでしょうか」

「出来ますとも」

「……………」

案外早く答えを返されたために、みきさんが言葉に詰まっています。人は予想外の即答に対して言葉を窮しますが、この程度の話術にひっかかつてはこの先生きていけないですよ？

「それをしないとと言う事は、何か理由があると言うことなんですね？」

そして代わりに言葉を次いだのはめぐみさん。察してくれているようで何よりです。

「ま、その質問を昨日の時点でされたらお手上げだったんですけどね。」

「わたしも昨晚までは妖精さんの力を用いようと思いましたけれど、おじいさんに止められてしまいましたからね」

「なんでですか？ 食料が増えることにデメリットはないはずですよ」

「ええその通り。だからさつきまで、わたしもこっそり増やそうかと考えていました」

「ならどうして……………」

みきさんからの視線がきつくなってきました。めぐみさんからも説明を求める視線が強い。

先ほどまでのわたしなら、これだけの賛同者を従えておじいさんを強引に説得しにかかっていたところですよ。ですが今なら、食料を増やしてはいけない理由が分かります。多分分かってるはず。多分。きつと。

「恐らく、食料を増やしても意味がないからでしょう」

「意味がない……………」

「ええ。その前に、おじいさんに確認したいことがあります」  
「なんだ」

さして衝撃のないおじいさんの表情が、答えだと言う確信を強めます。わたしは飛ばしてしまっただけで、おじいさんはそれを全て見ているもの。

考えてみれば、わたしがこの時代に飛ばされた時、旅に出ているはずのおじいさんが傍にいたことがおかしかったんです。偶然か何かだと思っていました。今にして思えば、きつとこの時代に飛ばされる頃だと思っただけから、わたしの傍に憑いていたのでしょう。

この世界についておじいさんが知っているとしたら、それはあの車窓から見た風景だけ。

「あの列車」の中の光景に、こんな事態はなかったんですね？」

「いや、あつたぞ？」

あれ？ ……ああそっか。失礼。

「そう、この状態からわたしたちの未来に収束するための過程を、知っているんですね？」

「ああ」

「そしてそれを解決させるための手段が、妖精さんですか」

「そう言うことだ。と言っても、流し見程度だがな」

「なんでこんな重大事態を流し目で見られるんですか」

「妖精さんがなんとかしてくれるだろ」

「これが旧人類が衰退した原因か」

誰も彼も妖精さんに頼り過ぎじゃありませんか？ いつかの衛星着陸時のように、妖精さんがいなくなった時、大変な目に遭いますよ？

けれど妖精さんの不思議パワーが消えれば旧人類もいよいよ滅びるのは事実。そしてわたしも妖精さん抜きでは生きていられない旧人類の一人。今回の件も、最終的に妖精さんの力を借りることになりそうですね。

「あの、一体何の会話をしているんですか？」

「列車とか収束とは、どう言う意味なんでしょう？」

「それを説明するにはおじいさんが死んだ事のあらましを説明せねばなりませんので、ひとまずは簡単に簡潔に分かりやすく、事実を述べます」

水や食料を増やしても意味がないこと。バイオハザードによる終末的世界。妖精さんでも帰る術のない現状。おじいさんがこの事態に巻き込まれた理由。

そう、全部ご都合主義の展開だったのですよ。

「最初から予定調和だったんです。わたしがここにいるのも、何をやるのかも」

「予定、調和？」

「それってどう言う……」

改めて思い返すと、その下らなさにほとほと疲れが出てしまいました。結局妖精さんに端を発した事件は、妖精さんの手によって纏められるんです。それは時々、とても強引な手によって。妖精さん絡みのトラブルなんて、毎回そんなものでしょう？

いつも通りつてことですよ。今回の件もね。

「さあ、みきさん、めぐみさん。調理室に案内して下さい。購買でも良いですよ。まずは砂糖や小麦粉や使える菓子類の確保です。そしてその後は、お望みどおり食べ物を量産します。野菜や果物。乳製品はお菓子に入るかな。まあとにかく、くるみもゆりさんも呼び戻して、皆で手伝ってもらいましょう。何を手伝うのかって？ そんなの決まっています。妖精さんが大好きな、甘くて美味しいお菓子作りですよ」

さあ、素敵なお茶会を開きましょう。お菓子をいっぱい散りばめた、愉快で楽しいお茶会を。

砂糖とスパイスを加えることが、彼らと付き合うコツなのですから。